

---

# 光子

宗像竜子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光の子

### 【Nコード】

N9035L

### 【作者名】

宗像竜子

### 【あらすじ】

HPの4周年記念に書いた作品の（微）加筆修正版です。

テーマは「共生」（「共存」に意味合いは近いけれど、言葉としてはこちらかな、と）

人口爆発を迎え、移民を目的とした外宇宙探索船が辿り着いた惑星。そこは居住可能な環境でありながらも、人体に有害な陽光が降り注ぐ、過酷な場所だった。

集落を束ねる長の娘・キアナと、その兄弟のように育ったリーウは、

太陽に供物を捧げる旅団に加わる。

キアナは見送る為に、リーウは《供物》となる為に。

設定はSFですが、内容はかなりファンタジーよりのシリアスな話です。

## Prologue

遠くで響く、重低音。

注意を払わなければ気付かない程度の振動に合わせて、それは彼の耳へと届く。

グ…ウン…グ…ウン…

…規則正しく繰り返されるそれは、まったく似てもないのに、まるで生命の持つ脈動のように彼には感じられた。

否 事実、それは鼓動に違いなかった。彼を含めた多くの生命を内に宿した、外宇宙探索船の《心臓》が立てる音なのだから。

（このまま…終わってしまうのだろうか）

管制室には彼の他に人気はない。

前方、270度に渡って広がるパノラマヴィジョンに映し出される漆黒の宇宙を見る者は、今現在では彼だけだった。

（本当に、何処かへ辿り着けるのだろうか？）

彼は自問する。

多くの人々に見送られて旅立ったあの日から、考えなかった日はない。しかし、日々が過ぎれば過ぎるほど、答えが遠のくばかりだった。

…今ではもう、積極的に肯定も出来なくて、彼の心を重く沈める。すでに、彼等が旅人になってから、地球時間で五年の月日が流れていた。

懐かしい惑星に別れを告げ、星の海へと船出したものの、彼等に明確な目的地は存在しない。

彼等はまさに、流浪の民 このまま流れ着く場所が見つからなければ、待つものは死のみ。

（そんな場所が…見つかるのだろうか？）

亜光速で移動しているものの、宇宙とはやはり広大であり、そしておそらく地上の砂漠よりも苛酷な場所だった。

すでに数えきれない程の惑星と出会いながらも、彼等がその羽を休められる場所は皆無だった。ましてや、目的とする『第二の地球』など見つかりもしない。

乗員は様々な職種を持つ研究者が数十人、そして残り九割以上を占める新天地を夢見たごく普通の人々      総勢、数百名。

彼等の乗る船の規格からすると、若干多すぎるほどの収容人数である。

それは、『箱舟』。

人工爆発を迎え、母星たる地球のありとあらゆるものを食い尽くした人間を減らす為に、時の政府が取り決めた大移住船なのだ。

(…もう、限界だ)

彼の精神も、この船も。

これ以上行く先もわからずに彷徨い続ければ、きっと呆気なく終焉は訪れる事だろう。

それだけは避けたいのに、今の彼等には待ち続ける事しか許されない。

狂うのが先か、それとも発見が先か…もし、この世に本当に『神』と呼ばれる存在がいるのだとしたら、喜んでその前に跪き、その足元に額づく事だろう。

プライドなど、この先どうだっていい。

…      生き延びたい。

空と大地の狭間で、普通に暮らし、天寿を迎えて死にたい…出来る事なら。不可能な事で、ないのなら。

彼は、祈った。

もはやそれしか、彼に出来る事はなかったからだ。

目的地のない旅は、舵をコントロールする必要もない。ただ、運

を天に任せて進むだけ……。

+ + +

その祈りが届くのは、それから数ヶ月後の事。

漆黒の宇宙に浮かぶ、荒野が広がる惑星が発見され、調査の結果、そこはかろうじて彼等が生きる事の出来る環境を有している事が判明した。

それは彼等が命を賭した賭けに、勝った瞬間だった。

## 旅団（１）

光を。

それから水を。

そしてほんの僅かな愛情と。

わたしはそれで、生きてゆける。

+ + +

「さあ、これからここが、お前の家だ」

少し荒れた大きな手に引かれ、見知らぬ小さな家へと連れて行かれる。

『家』と言われても、ピンと来ない。

『家』とは人が住む所。

そして自分の居場所、という意味でもあるらしい。一体どんな所なのだろうか？

小さな疑問が胸に湧いたものの、手の持ち主はそんな困惑に気付かないように、その家へと誘<sup>いざな</sup>う。

ぐるぐると厚手の布を身体に巻きつけた、大柄の男だ。頭にも布を巻きつけているので、その表情がよくわからない。

だが、それはこの地に生きる人々の一般的な服装だった。

男との面識はなかったけれど、拒否する理由もないから、おとなしく従ってついて行く。すると、男が開く前に先に扉の方が開いた。

「父さん！ お帰り！！」

飛び出してきたのは、自分より少し年上の子供。

身体全体で喜びを表して、嬉しそうに手の持ち主      その子供

の父親だったらしい      に勢いよく抱きつく。

そしてその大きな黒い目が、あれ、と言うように自分を映した。

「父さん、この子、誰？」

「この子は今日からうちの家族になる子だ。…仲良くしてやるんだぞ？」

「うちの家族……？」

じつと黒目がちの瞳がこちらを見る。

何となく居たたまれなくて俯うつむきかけた時、ふいに暖かいものが身体を包んだ。

「わあ！ すごい、すごい！！」

その声は耳元からしていて、それでその子供が自分に抱き着いている事にやっと気付く。

一体何をそんなに喜んで、そして何がすごいのかさっぱりわからなかったが、ぎゅっと抱き締めてくるその腕は暖かい。

弾んだその声が嬉しそうだっただ、自分も何だか嬉しかった。

「よろしく！」

身体を離して、につこり笑うその笑顔がとても綺麗だったから。つられたように自分も笑った。

それまで自分の内にあつた、不安や淋しさのような感情が消えてゆく。まるでお日様のような笑顔だ、と思う。

闇を退ける、明るい光を自ら放つ太陽のような。真っ直ぐで強いけれど、暖かい。

「おいでよ、うちの中、案内したげる！」

その子供は有無を言わさない口調で言い、そして腕を取って家の中へと誘ってくれた。

…それが、『家族』を新たに得た瞬間。今はもう、遠い昔の事…



…。

+ + +

刺し貫くような、陽の光。

直接見では目がつぶれるよ、と隣を歩く人が笑った。

でも遮光ガラス越しに見て、本当の太陽の色がわかるんだろうか？

やはり歩きながら、リーウはそんな事を思う。

旅団は、黙々と旅を続ける。

みな、それぞれ目深にフードを被り、強い陽射しから身を守る。人によっては遮光処理されたゴーグルのようなものまでも身に着けていて、表情をわからなくしていた。

この星の太陽の光は、ヒトの体には毒なのだ。

…それは遠い、遠い過去。

この星へと流れ着いた人々は、そこがかつての彼等の故郷に近い環境である事がわかると狂喜し、そこに定住する事を決めたという。

否　　彼等は最初から、帰る場所などなかったのだ。

彼等が手にしていたのは、片道の切符。外宇宙移民とは名ばかりの、死出の旅だった。

当時、何光年も離れた場所へ有人の宇宙船が行って、そして戻ってくるなど、技術的に不可能だったからだ。

しかし、彼等は賭けに勝った。

彼等は彼等の新たな故郷を広大な星の海から見つけ出せたのだ。けれど。

「リーウ！　フードを被れ！！」

まだ物心つくかつかないかの子供の頃に、語り部から聞いた昔語りを思い出していると、そんな怒声と共に脱いでいたフードをバサ

リ、と勢いよく被せられた。

「直射日光を甘く見るなど、何度言えばわかるんだ!？」

声の主を見れば、自分より少し背の高い、細身の姿。

「キアナ」

「このほか。ちょっと目を離すとこれだ」

乱暴な口調。しかし、フードの隙間から見えるのは、そんな言葉を発した人物とは思えない、端正な顔だ。

白い肌、湖の深淵を覗き込むような感覚を齎す、もたら深すぎて黒に見える緑の瞳。

切れ長のその目元に、赤い化粧がどこされている。それと同じ紅が、唇を彩っていた。

そう、キアナは女性なのだ。化粧をしているのは、成人している証。

リーウは、その人がフードを脱いだ時、滝のように真つ直ぐな黒髪が流れる事を知っている。隠すのが勿体無いと思う。

思っけれど　そんな事を面と向かって言えば、照れ屋な所があるこの人が余計に隠そうとする事もわかってるから、決して口にはしない。

「ぼくは大丈夫だよ」

代わりのようにそう言うと、キアナはぎろりとこちらを睨む。

「…ほーう、口答えか」

「違……!」

そうつつもりで言ったわけではない。

思わず焦って否定しようとするのを、キアナが感極まった口調で遮った。

「わたしはお前をそんな風に育てた覚えはないぞ!」

「　　ぼくはキアナに育てられた覚えがないよ……」

どうやら、キアナを怒らせてしまった訳ではないらしい。

見れば、その目が笑っている。その事に安堵して、リーウは苦笑を浮かべた。

リーウとキアナの関係は親子でもなければ、姉弟でもない。強いて言えば、幼馴染なのだろうか。

リーウの中の限られた知識では、じっくり来る言葉が見つからない。

ただ、リーウはこの二つ年上の彼女を好きだし、彼女も自分に少なからず好意を持つてくれているという事は確かだった。

緩やかな丘陵地帯を、彼等は今もう長い事歩いていた。

目的はただ一つ　その果てにある《聖地》に供物を捧げる為。

《聖地》に奉<sup>たてま</sup>られるのは、この世界を支配する太陽そのもの。

その光を浴びすぎれば彼等に待つのは死でしかないが、それでもその光がなければこの星自体が滅んでしまう。

そう、彼等は何処まで行っても『異邦人』の枷<sup>かせ</sup>から逃れられないのだ。

## 旅団（2）

「リーウ…話がある」

その日 《聖地》へ旅団を出すと決定された夜の事。

キアナは夜更けだというのに、突然リーウの部屋にやって来た。成人女性にあるまじき行為だったが、時間帯を考えなければいつもの事だったので、リーウは思わず迎え入れてしまった。

いつも男勝りで快活なキアナが、泣いているような気がして。扉の向こうに立っていたキアナは、泣いてはいなかった。ただ、思いつめたような顔でリーウを真っ直ぐに見つめてくる。

その視線の強さに、リーウはかける言葉を失った。

「…お前、自ら《供物》に志願したって…本当なのか!？」

「……」

何となくその事ではないか、とは思っていたのだが、実際にキアナの口から尋ねられると、何だかとても悪い事をしたような気になった。

《供物》になる事。それは決して…いや、むしろ称えられべきであって、<sup>けな</sup>貶される事ではない。罪悪感など、感じる余地もないはず。

…そのはずなのに。

「…やめろ」

今までにない強い口調で、キアナが命じる。

「今からでもいい、撤回するんだ!」

「何故?」

「何故、だって……?」

キアナは信じられないものを見るような目をリーウに向けた。深淵の瞳に、戸惑うリーウの姿が沈んで見える。

「供物になれば…死ぬんだぞ!？」

抑えきれない感情が、キアナにそう叫ばせた。

キアナは彼等の集落を束ねる、長の一人娘。

将来、現在の長がその位を退いた後は、長となり人々を束ねる身の上なのだ。本来なら、誰よりも供物の必要性を説く立場である。

…多分、供物になるのがリーウでなければ、きっとそんな風には思わなかっただろう。

「…じゃあ、キアナ。君はあんな子供が供物になるのはいいの？」

まるで見透かしたように、リーウが問う。心底、不思議そうに。

そう…いつもなら、まだ物心もつかない子供を捧げるのだ。それも、可能な限り身寄りのない者を。

半分は、口減らしの意味もある事は否定出来ない。

それが見過ごせなくて、リーウは自ら供物になる事を志願した。

その子の代わりに、自分が、と。

そう…時期が時期だったなら、リーウもそうやって果てていたかもしれないのだ。

物心つく前に両親を失い、天涯孤独の身の上になった彼を、今まで養い育ててくれた長とその家族がいなければ、供物にすらならずに死んでいたかもしれない。

…そう思ったら、もう自分が止められなかった。

その辺りのやり取りは、父親である長經由でキアナも聞いた。

リーウらしいと思う。《供物》になるのは栄誉なのだ、と言い聞かせようとする自分もいた。

でも、駄目だった。

「嫌なんだ…お前が死ぬなんて、耐えられない」

「キアナ……」

「お前はもう、わたしの家族なんだ。五つの歳から一緒に暮らしてこれからもずっと、そうだと思っていたんだ。だから……」

「キアナ」

とめどなく溢れそうになるキアナの言葉をやんわりと遮って、リーウは困ったように微笑んだ。

「決めたんだ。それに……」

「……？」

「ずっと、思ってたんだ。どうしたら、長やキアナに報えるんだろうって」

リーウは同じ年頃の子供達と比べるとひ弱で、力仕事では役に立たないし、専ら長はつの補佐のような事をやっていた。

この、過酷な環境の中で。

リーウのような存在は、実際役立たずに思われても仕方がない。今までそうした扱いを受けなかったのは、ひとえに長とその家族の人徳としか言い様がなかった。

「長も怒ったけど…でも、最後にはわかって下さった」

「わたしはわかりたくない！」

そう、言いながらも。

キアナにも、もはやどうやっても、リーウの心を止める事が出来ないであろう事はわかっていた。

リーウは昔から、一度『こうだ』と決めた事は必ずやり遂げる。腕力がない代わりに、強い精神力を持って生まれてきたのだろう。生半可な事では、リーウを説得する事なんて出来ない。

…そうだ、子供の頃からこの二つ下の少年に、口で勝った試しはないのだ。

その事実気付くと、キアナは諦めたようにため息をついた。

「…でも、どんなにわたしがひきとめても、お前は絶対に撤回してはくれないんだろうな……」

「…キアナ……」

「わかった…もう、何も言わない。その代わり、供物を奉納する旅団にはわたしも加わるからな」

「えっ？」

突然のキアナの言葉に、今度はリーウが面食らう番だった。

《聖地》は陽光照りつける丘陵地帯の先にある。陽を遮ってくれ  
るものがない、過酷なものとなるのだ。

当然、今まで女性が旅団に加わった記録などない。

陽の光は死の光                      時として、女から子を育む力すらも奪うと  
されている。

「だ、駄目だよ、キアナ！ 何を言って……！！」

「うるさい。絶対にこれだけは譲れないぞ。…せめて、最後を見送  
らせてくれ」

「キアナ……」

「大丈夫だ。父はわたしが説得する。リーウに迷惑はかけない」

縋るような瞳に、リーウはそれ以上の言葉を失う。キアナもキア  
ナで、結構な頑固者なのだ。

そしてキアナは言葉通り、長を説得して旅団に加わった。

前代未聞の事だったが、キアナとリーウの睦まじさを知っていた  
からか、結局最後には皆、キアナの言葉を受け入れたのだった。

+ + +

夜になり、旅団は足を止めてそこに野営する事となった。

獣などもないわけではないが、見通しの良すぎる場所だけに、  
姿を見せる事もほとんどない。

（あと、どの位なんだろうか）

唯一の女性という事もあって、一人独立した天幕をあてがわれた  
キアナは、一人これからを思って小さくため息をついた。

こういう時こそ、リーウと共に在りたいのだが、なまじ自分が成  
人しているせいでままならない。

何度か旅団に参加している者の言葉によれば、今回の旅は何時も  
以上に問題のない旅だと言う。ならば、《聖地》に辿り着くのは予  
定より早まるという事だろう。

あと、一日だろうか。それとも二日？

このままでは、リーウとまともに話す事なく別れてしまいかねな  
い。

…否。

心の内で否定して、キアナはその唇を噛み締める。

(リーウには悪いけど、絶対にそんな事にはさせるものか)

キアナが同行を決めたのは、リーウの最後を看取る<sup>みと</sup>為ではない

共に、生きる為。

(…旅団を途中で抜けて、リーウを助ける。連れ帰る事が出来ないなら、そのまま何処か暮らせる場所を探したっていい。死なせるものか……！)

リーウはどうか知らないが、キアナは彼が好きだった。

恋愛感情というよりは、庇護<sup>ひじょく</sup>欲に近いのかもしれないが、彼が死ぬのは我慢ならない。

姉弟のように、ずっと一緒だった。これからもそうだと信じていたのだ。こんな風に、終わっていいはずがない。

(…絶対に、死なせない)

たとえそうした結果、この星が滅びてしまうのだとしても。



聖地？

《聖地》に辿り着いたのは、それから二日後の事だった。片道、およそ五日。長いようで短い旅程だ。

「……ここが、《聖地》？」

生まれて初めて見たそこは、彼らの予想を裏切って、到底聖地

聖なる場所とは思えない所であった。

そこへ辿り着くまでの緑豊かな丘陵地帯と異なり、荒れた大地が露出し、成人男性が数人収まるくらいの巨大な岩が、ぽつんと一つだけ鎮座している。

それが《聖地》の全てだった。

「本当にこんな所が……？」

疑問を隠せないキアナとリーウに、過去に何度もここに訪れている旅団の長は、頷いてで肯定する。

「そうだとも。ここが《聖地》。この岩は昔、太陽の方角からここへ降ってきたそうだ。それ以来、太陽の化身として扱われている」

こんな所 周囲に何も無い物寂しい場所に、リーウが一人取り残されるのかと思うと、キアナは益々心の内で決心を固めずにはいられなかった。

《供物》とは言えども、ここで殺される訳ではない。ただ置き去りにされるだけだ。

けれど不思議な事に、次の旅団が訪れた時、そこに骨が残っている事はないと言う。

（それって、やっぱり逃げたんじゃないのか？）

キアナにはそうとしか考えられない。

年端もゆかない子供が、何処まで行けたかわからないが、それならばリーウを連れて逃げてても問題はなくなる。《供物》がなくても、災いは起こらないという証明になるのだから。

そんな事を考えている間に、バサリ、と布の立てる音が耳に入っ

た。

音の方へと目を向ければ、案の定リーウがフードを脱いでいた。またか、と反射的に怒鳴りかけて      キアナは言葉を失った。

色素の薄い髪と色白の肌は、太陽の光の下で、リーウをまるで別の世界の住人のように見せていた。

村では軟弱な印象しかなかったのに、いつそ神々しいとしか表現できない雰囲気がある。

「…リーウ？」

何故かひやりとしたものを感じとって、思わず名を呼ぶ。

「キアナ」

表情を硬くしたキアナに対して、リーウは何処かすっきりした顔で微笑んだ。

「元気でね」

「…何、言ってる……！」

そんな事、させる訳がないだろう！

思わず叫びかけて、危うい所で言葉を飲み込んだ。代わりに、ぎゅっと抱き締める。

成人してからそんな事をした事がなかったからか、リーウがぎゅっと目を丸くした。

「キ、キアナ……」

「…フードを被れと言っただろうが」

ちよっとだけ勿体無く思ったが、再びリーウの頭にフードを被せる。

これから後の計画など、当然リーウは知りもしないが、それまでは無茶な行動はして欲しくなかった。

日光に晒さらされたからと言って、すぐに身体に影響が出る訳ではないと知っていても、そうせずにはいられなかったのだ。

「…頼むから、自分から死を招くような真似はしないでくれ」

「うん、…ごめん。キアナ」

祈るように告げると、リーウは素直に頷く。

そんな二人のやり取りを見計らったように旅団の長の声がかかった。

「引き上げるぞ、キアナ」

「……」

いよいよだ。

キアナは身を離し、何となくそうしなければならぬ気がして、リーウの顔をじっと見つめた。脳裏に焼き付けるように。

リーウも、何処か淋しげな目でキアナを見つめる。そんな顔を見ると、一層離れがたい気持ち湧いた。

「……キアナ」

「わかつている……」

旅団長が急かすように声をかける。

彼とて、こんな事を進んでやりたい訳ではないだろう。出来るだけ速やかに事を終わらせてしまいたいと思う気持ちを、責める権利はキアナにはない。

言いたい事、伝えたい事がいくらかでもある気がした。

けれど、それはまたリーウと逃げる時にでも話せばいい。そう自分を納得させ、キアナはリーウに背を向ける。

「キアナ」

その背に、リーウの言葉だけが追いかけてくる。

「今まで、ありがとう」

まるで今生の別れのような言葉に、胸が締め付けられた。いつそ、今この場で彼を連れて逃げる事まで考えてしまう程に。

けれど、キアナは振り返らなかった。自分がリーウを諦めたのだと、念の為に周囲に思わせておく必要がある。

……今夜。

全ては、夜になってからだ。

+ + +

一人また一人と《聖地》を離れてゆく人々を見送り、リーウはただ一人その場に取り残された。

旅団の最後の一人の姿が丘の向こうへ消えるのを確認してから、リーウは再びばさりとフードを落とす。生身の身体に、有害であるはずの陽光があたる事もまったく頓着とんちやくしない。

キアナが見れば、すぐさま叱責しっせきの聲が飛んでくるのだろうか、もうここにキアナの姿はない。

リーウ自身、どうして今日はこんなにも陽光を直に感じたく思うのかわからないでいた。

わからないけれど、それが必要なだと、心の内で何かが囁いている。

そのまま、彼は《聖地》に転がる巨大な岩に背をもたせて座り込んだ。…そして、呟く。

「…そうか…ぼくは…ここへ来なければならなかったんだ……」

零れ落ちた言葉は、口にした途端、確信へと変わった。

目を閉じて光を浴びていると、益々それが気のせいではないとわかる。

招かれたのではなく、呼ばれたのでもなく。

自分は最初からここへ『戻って』来るように決まっていたのだ、と。

背に触れる岩の感触が心地良かった。

有害であるはずの陽光が、切ない程に愛しかった。

…今、自分が存在するこの大地が、とても身近なものに感じる。世界の全てと一つになるような、そんな不思議な感覚に支配された。

五感が今までのものとは異なるものへと変化してゆくのを知覚する。

喜怒哀楽、その感情の意味も価値観も、人のそれとは隔たれてゆく。けれど、リーウはそれを恐れはしなかった。

何故ならそれは、彼にとってはすでに『識<sup>し</sup>っている』感覚だったからだ。

自然に受け入れ、為すがままになる。意識が次第に遠のいていく。  
…ただ、意識が途切れる最後の最後でキアナの顔が思い浮かんだ時、充足感で満ち足りていたその胸が、ちくりと針が刺さったように痛んだけれど。

## 思慕（1）

太陽が地平線の向こうへと姿を消す。

日没が訪れた事で、旅団はその足を止めた。行きと同じく、そこで野営をする為だ。

キアナは夕食の支度を手伝いながら、じっと時間が過ぎるのを待ち続けていた。

黙々と作業を手伝うキアナを、リーウを失った悲しみを紛らわそうとしているように見えたのか、周囲の人々はそっとしておいてくれる。

まさか、キアナが今夜旅団を離れ、リーウを助けに行こうとしているなど、夢にも思っていないのだろう。

夜空には宝石箱をぶちまけたような星々と巨大な月が輝き、彼等を見下ろしている。

こんな状況でなければ、キアナも見とれたに違いない程の素晴らしい光景だった。

夕食後、人々は無事に供物の奉納が済んだ事もあってか、ささやかながら宴会のようなものを始め出した。

火を焚き、それを囲んで歌い、踊り、そして酒を酌み交わす。

《聖地》までの道のりでは、彼等は酒を口にする事はなかった。

携行はしていたものの、あくまでもそれは気付けや消毒といった、薬代わりのものとしての位置づけだからだ。

神聖な儀式であるというだけでなく、それだけ油断のならない旅でもある。酔えばどうしてもいざという時の行動が遅れる。

そんな彼等が酒を口にしているのは、単純に無事もなく大役を果たせた事への安堵もあるのだろうが、大部分が一人の命を見殺しにするやりきれなさ、恐れを誤魔化す為に違いなかった。

それがわかるから、キアナもそれを不謹慎だと責める気持ちにはならない。

キアナも宴席に誘われたが、そんな気分じゃないから、と理由をつけて早々に天幕に潜った。

夜の内に旅団を抜け出す計画だったが、この分だとみんなはなかなか寝静まってくれないだろう。

うまく抜け出せたとしても夜の闇の中、何処まで進めるかわかったものではない。一日かかった距離を、同じ一日で取り戻せるか怪しい所だ。

じりじりとした焦りを感じながら、それでもキアナは自分を宥めて装備品を確認した。

こっそりと用意していた数日分の食糧、日除けにもなる少し厚めの布が二枚、細めのロープが三本、大ぶりのナイフは腰にくくりつける。

皮製の水袋には、先程の夕食の手伝いの間に人目を忍んで補給した。

それでも行く当てのない以上、装備はどう頑張っても万全とは言えないものになる。

（でも、何もないよりは遥かにマシだ）

自分に言い聞かせて、手早く荷物をまとめる　そして。

思いつくままに袋に荷物を詰め込んでいた手が、ぴたりと止まった。やがてゆっくりと思い出したように指が動き、それを手に取る。

それ　木で作った玉に色を塗って絵を描き、そこに穴をあけて束ねた手作りの首飾りを。

子供が作ったような拙いものだ。所々塗った絵の具が剥けてさえいる。

それもそのはず、それはリーウがキアナと暮らし始めて間もない頃に、自分で作ってキアナにくれたものだった。

子供の頃に作られたそれは、もはや成人したキアナの首を飾るには小さ過ぎた。

そうでなくても、普段から身を飾るものなど着けないキアナは、今までその存在も忘れていたくらいだ。

しかし、旅に参加出来るとわかり、その装備を整えている時に偶然これを見つけた。まず懐かしさを感じ、そして…これを旅へ持つて行こうと思った。

それがまるで、お守りか何かのように感じられて　。  
一体何から何を守ってくれるものだと思うのか、キアナ自身にもわからなかったけれども。

それを手渡してくれた、まだ幼かったリーウの笑顔を思い出して、キアナは切ない思いに囚われた。思い出は何処か曖昧で、細かい部分はもはや思い出せない。

けれど、何故かその笑顔だけはしっかりと脳裏に刻み込まれていた。そして、その時どんなに自分が嬉しかったかという事も。

…木はそうでなくても貴重な物だ。

陽光が人体に有害であるこの地上において、木は木陰を作って陽光を和らげてくれる上に、彼等の家を建てる時には材料にもなる。

だが、滅多に雨が降らない上に、水はあっても地下深くにしか存在しない為に、木の成長はすこぶる悪かった。

木で作られたビーズは、集落の誰かが家を建てた時に出た木切れで作られるのが普通だ。逆を言えばそんな時でもなければ手に入らない。

だからこそ、それで出来たものほどなんなもので貴重品となる。たとえば結婚式が行われる時、村の女性達から花嫁の幸福を祈って、一人一人ビーズを一つずつ出し合って腕飾りを作って贈る。

それも、その稀少性と同時に木が太陽の光を糧にするものとして、神聖なものと捕えられているからだ。

今にして思うと、リーウは何処から木切れなどを見つけてきたのだろう。

貰った時はただ嬉しくて、そんな事などまったく考えも及ばなかった。あの頃、誰か家を建てていただろうか……？

そんな事を思い出していると、周囲がいつの間にか静まりかえっている事に気付いた。



流石に明日の事を考えて早めに宴を終わらせたのだろう。まだこれから旅は続くのだから。

キアナはその首飾りを少し考えてから手首に絡め、手早く身支度を調えた。

身一つのリーウを思い、装備品は思った以上に大きく、そして重いものになっている。けれどキアナの決心は揺らがない。ついに立ち上がった。

そろりと天幕から顔を出し、周囲を見回す。どうやらほとんどの人間が寝てしまったようだ。

ひやりとした夜気がキアナの心を余計に急かした。

(…頼むから、風邪とかひいていないでくれ、リーウ)  
祈るように思いながら、キアナは夜の闇の中を駆け出した。

## 思慕（2）

星と月の明かりの下、キアナはひたすらに先を急いだ。

今まで通った道を戻る　それだけなのに、夜の闇の中ではともすれば方角もわからなくなる。何とか周辺に見覚えがある内に行ける所までは行きたかった。

緩やかな丘は、旅団の一員として歩いている時はさほど辛くもなかったが、重い荷物と焦燥がキアナに負担をかけ、そして疲労させる。

日中休みなく歩き、ろくに休まずに引き返しているのだ、当然足取りは次第に重いものになる。

それでもキアナは足早に先へと進む。

（どうか…無事でいてくれ……）

祈るように思う。

夜行性の動物には、<sup>じつじつ</sup>獰猛なものだって存在する。まったく身一つの無防備な状態で置き去りにされたリーウは、そうでなくても身を守る術を持たないのだ。

真っ直ぐに進んでいるつもりだったが、次第に方角が怪しくなってくる。

草は生えても木々が根付く事のない丘陵地帯では、目印と言う目印がないからだ。日中ならば太陽の位置で判断できるが、日が暮ればそれも出来ない。

（…星読みをちゃんと習っておくんだっ たな……）

軽く舌打ちする。

夜でも星の位置で大体の時刻や方角を読める。古くから伝わる知恵だ。

だが、普段の生活では特に必要のないものである為、キアナもそれがどういふものかろくに知らなかった。

二つある月の内、一の月と呼ばれるものが天頂に昇ったら真夜中

だ、とか、太陽が沈むとその沈んだ方角から、もう一つの月である二の月が昇る事、二の月は二日に一度しか昇らないというくらい知識しかない。

そうした知識もないよりはマシだろうが、一般知識の程度を超えるものでもない事も確かだった。

…そして今、飲み込まれそうなほど大きな月が、キアナの頭上へ昇ろうとしていた。

今日は二の月が昇らない日だ。これで一の月が沈みかけない限り、方角を知る標は失われた。

（《聖地》は太陽が昇る方向にあった。このまま進めばいい。迷うな！）

自分を叱咤し、キアナは立ち止まりかけた足を再び先へと進める。あの《聖地》にあった巨大な岩　あれさえ見えれば。

それだけを思つて、キアナは進む。幸か不幸か、草原にいる獣は現れる気配はなかった。

旅団が通る時期は獣も警戒して出なくなる、と話には聞いていたものの、その事実キアナを少なからず安心させるものだった。

足を動かす度に、腰に下げたナイフがカチャカチャと音を立てる。何処か神経に障る、耳障りな音だ。

男勝りで気が強いキアナだが、ナイフの扱い方など　しかも何かを傷つける事を目的とした使い方など、知りたいとも思わなかったし、知る必要もなかった。優しいリーウに至つては言わずもなだ。

出来る事ならこれから先も、使わずに済めばそれに越した事はない。もつとも、野生の獣に何処まで齒が立つのかわかったものではなかったが。

息が上がり、喉が渴きを訴え始める。それを堪えて、ただ進む。もはや戻る道もわからない。だから進むしか道はなかった。

頭上の月だけが、静かにキアナの行く先を照らし出していた。

+ + +

どの位歩いた頃だろう。

月が大地の際まで移動し、白々と視界の先から夜が明け始める。疲労で霞むその目に、それはまさに希望の光に映った。

少なくとも 進んでいる方角は間違っではないなかったのだ。

安堵と共に、鬱陶しさから跳ね除けていたフードを被り直す。

ここでうっかり太陽の光などを浴びたら元も子もない。

… 陽光は嫌いではない。

陽の光の下の世界は何もかもがはつきりと見えて、キアナは夜よりも好きなくらいだ。

だが、リーウを奪おうとしたのはこの陽光。その光を生み出す、太陽の化身。

陽光に対して憎しみを抱いたのも、そして安堵感を抱いたのも、これが生まれて初めての経験だった。

そう… 本当はわかつているのだ。太陽には何の非もない事を。

問題があるのはむしろ、この光を受け入れて生きてゆく事の出来ない人間の方なのだ。

生きてゆけないから太陽に供物を捧げ、生きてゆけないからリーウのような罪もない者が犠牲になる。

供物など捧げた所で、この陽光が無害になる訳でもないのに。

人は 本来、この大地に生きるはずのなかった存在であるのに。

もはや疲労から足を引き摺るようにして歩きながら、キアナは取りとめもなくそんな事を考えた。

何かを考える事で、ともすれば遠くなりそうな意識を、現実に取り止めようとしていたのかもしれない。

だから視界にあの巨石が目に入った時、キアナは思わずそこに座り込んでしまった。

暁の薄紫を帯びた光を背に、その岩は何事もなかったかのようにそこにあった。緊張の糸が切れる。

あともう少し頑張つて、岩の所に辿り着かなければならないのに、足から完全に力が抜けた。

「……リーウ……」

聞こえる訳がないとは思いつながら、キアナは呟く。まだ周囲は暗く、岩の所にリーウがいるのかもわからない。

急に背負っている荷物が重く感じられてそれを下ろした。そして皮袋を取り出し、そこに入っている水を一口だけ飲む。

乾ききった喉はその水を喜び、それだけでほんの少し元気が戻る。もう少し。

陽があと少し昇れば旅団の人々も起き出し、キアナがない事に気付くだろう。

しかし、気付いてすぐにここへ引き返したとしても、まだ当分は追いつかないはずだ。

だから慌てなくてもいい、と自分に言い聞かせて、そろそろ立ち上がった。がくがくと膝が笑う。結構な強行軍だったのだからそれも当然だと言えた。

また荷物を背負うのは躊躇われて、引き摺って先に進む事にする。当然歩みはそれまでとは比較にならない遅いものになった。

それでも、進まなければ辿り着けはしないのだ。

次第に明るくなってゆく中、キアナは時折よろめきながら《聖地》へと近付いてゆく。

今はリーウの無事な姿を見る事、ただそれだけしか考える事が出来なかった。

聖地？

巨石の元へ辿り着いた時には、太陽は完全に地上を離れていた。陽光を避けるようにフードを被り直しつつ、キアナは辺りを見回した。

静かだった。

風もなく、特に音を立てるものもない。それ所か　生き物の気配すら感じられなかった。

「…リーウ？」

何だか得体の知れない、不安が胸に湧き上がる。

《聖地》の岩は実際巨大なものだ。しかし、それでも少し小さめの家程度でしかない。呼びかけた声が聞こえない距離はないはずだった。

…けれど。

「…リーウ…寝ているのか？」

姿を求めて岩の裏側へ回ってみる。しかし、そこに求める姿はなかった。

その代わりに　。

「……！？」

反射的に駆け寄っていた。

天から差し込む陽光が、辺りの風景も何もかもはつきりと照らし出す。見間違えようがなかった。

…草の汁で染めた、幾分くすんだ緑　その色は確かに見覚えのあるもの。

「…どうして……」

直接手で触れる事も出来ずに、呆然と呟く。それは　昨日別れた時にリーウが身に着けていた物だった。

キアナの母が寝る間も惜しんで織って仕立てたそれが、散らばるでもなく剥き出しの大地に蟠わだかまっている。

まるで、自分から脱いだというよりは、中身だけ消えてしまったかのような有様だ。キアナでなくとも、おそらく困惑しただろう。

（何が…あった？）

そのまま座り込み、そろそろと衣服に手を伸ばす。

掴んだそれに、血痕のようなものも、破れたり引き裂かれたような跡もない事を確かめる。

ない。

思わず、安堵のため息が零れる。ならば、少なくとも獣に襲われたりした訳ではないという事だ。

（じゃあ…どうして服だけがここに？）

訳がわからない。

途方に暮れ、何も考える事の出来ない頭にふと思い浮かんだのは、旅に出た初日に聞いたあの言葉だった。

曰く。

『供物を捧げるのは二年に一度だ。五つある集落を順番に　つまり、一つの集落には十年に一度回ってくる訳だが　同じ場所に奉納するのに、不思議とそこに骨が残っている事がないんだよ。…まるで本当に神に饗されたかのようにな』

…いくら子供や赤ん坊でも、二年かそこらで骨まで完全に土に還るはずがない。だからこそキアナも思ったのだ。

逃げたか、もしくは獣にでも襲われて、骨まで食われてしまったのだろう、と。

しかし、年端もゆかない子供ならばともかく、今年十六の年を迎えるリーウが消えたとなれば　しかも衣服だけ残して　話は違う。

…何かが起こったのだ。リーウが姿を消す、何らかの出来事が。

（　まさか）

思い至った考えに、キアナは目を見開く。

やがてその目は、傍らで沈黙を守る巨岩に向けられた。：おそろく、この世で唯一、確かにリーウの行方を知る物へ。

どれ程の年月、そこにあったのかわからない。

少なくとも百年以上はここにあるはずなのに、まったく周囲に馴染まない異質なモノ。かつて太陽の方向から飛来し、太陽の化身として扱われるモノ。

そして、リーウが奉じられる何代も前から、《供物》を捧げられてきたモノ。

「《供物》とは：本当にこれに捧げられた生き贄だったというのか……？」

思わず口にし、その恐ろしさにキアナは身を震わせた。

そんなばかなと思う。しかし、与えられた事柄から導き出される、納得の出来る答えはそれ位しかなかった。

：最も突飛だが、ある意味真実であろう、その答えだけしか。

「リーウ」

ふらりと立ち上がったキアナの口から零れ落ちたのは、悲鳴のような 呼び声。

「リーウ！ リーウ、隠れているんだろう？ わ、わたしを：驚かせようと：からかっているだけなんだろう！？ ：リーウ、返事をしろ！！ そうなんだろう！？」

叫ぶ。

そうでもしなければ、頭がどうにかなってしまいそうだった。

そう やがて何処からリーウが顔を見せて、困ったような表情で『ごめんね、ちょっと驚かせようと思ったんだ』：そんな風に言ってくれる。そうでも、思わなければ。

リーウの残した服を手に立ち上がり、岩の周辺をぐるぐると回りながら名を呼んだ。

先程一口水を含んだだけの喉はすぐに乾き、呼ぶ声は次第に掠れて力のないものになる。それでもやめる事が出来なかった。

太陽は、そんなキアナを嘲笑うかのように天頂近くまで駆



け昇ってゆく。それと同時に気温も上がり、不眠不休だったキアナから更に体力を奪い取る。

「…んで…ど、うして…応え…ない……？」

わざわざ服だけを残して逃げる事はないだろう。ならば、すぐ近くにいたはずなのだ。

キアナの、すぐ側に。

でも、待ち望む応えの声は返らない。

「何処へ行った…リーウ……！！」

やはりあの最後に別れを告げた時、無理にでも連れて逃げれば良かったのだ。

もしくは…後で迎えに行くから待っていると、説得していれば。

…後悔だけが、心を重く支配する。

こんなはずではなかった。こんな風に終わるはずではなかったのに。

…こんな風に、あの笑顔をもう二度と見れなくなるなんて。

「…え？」

そこでキアナは愕然となる。

…思い出せない。

こんなにも切実に求めている、リーウの顔、表情その全てが、まったく思い出せなくなっていたのだ。

リーウはどんな風に笑っただろう？

どんな仕草をして、どんな癖があっただろうか？

それらがごっそりとキアナの中から抜け落ちていく。

昨日の今日だ。ましては危険を承知で助けに来た、その相手の顔を忘れるなんてあろうはずがない。

なのに　何度思い返しても、浮かび上がるのは印象や言葉ばかりで、表情や声といった直接本人を示すものではなかった。

「そんな……」

寒くもないのに、がたがたと身体が震える。がくり、と膝から力が抜けた。

眼前の岩がリーウを取り込んでしまったのではないか、そんな事を思った時に感じたものよりも、その感覚はずっとずっと恐ろしいものだった。

やがて力なく見上げたのは 太陽。

（太陽…あなたは、思い出すらも…何もかも奪い去ってしまうのか……！？）

太陽はキアナの心の叫びなど知らないまま、いつもと変わらぬ光を地上へと降り注いでいた。

## 涙（１）

気がつくと、キアナは岩に背をもたせて座り込んでいた。

陽光で温まった岩肌が、まるで生きて体温を持っているかのようだ。その温もりだけを、キアナは感知している。

…リーウは結局、姿を見せない。

太陽は僅かに傾き、少しだけ光を和らげている。おそらくそう時を待たずに、追手が来るに違いなかった。

朝方、不在に気付いてすぐに動いているとしたら　　キアナより歩みはきつと確かで速い。すぐにでも視線の先、なだらかな丘の向こうから姿を見せるはずだ。

おそらく、こっぴどく怒られるに違いない。

そんな風に思ったら、何だかばからしくなつて、キアナは自嘲のような笑みを口元に浮かべた。

（…それとも、彼等が来る前にわたしもリーウのように食われてしまったりしてな）

そう考えて、それでも良いような気がしてきた。

もはや、リーウの事は名前くらいしか思い出せなくなっている。完全に忘れてしまうくらいなら、そうなってしまった方が、いっそ幸せのような気がした。

（仮にここに捧げられた《供物》が全てこれに食われたとして  
今まで赤ん坊や、ろくに物心もついていない子供ばかりだ。わたしも行けば…リーウも淋しくないよな）

この岩石がリーウを取り込んだ　　現実離れた答えだったが、だからこそ、それを信じるのは簡単だった。

そう思えたら楽だったから。

まるでいつか覚める、悪い夢か何かのように。

+ + +

「…探したぞ、キアナ」

いつの間にか眠っていたらしい。

重い目蓋を持ち上げてみると、太陽を背に見覚えのある人物が数人立って、キアナを見下ろしていた。

「…旅団長」

「まさかと思つたが…ここまで辿り着くとはな。…この大ばか者が」  
怒りを通り越してしまったのか、それとも呆れ果ててしまったのか  
無事にキアナを発見した事で安堵したからなのか。

旅団長は呆れたような、そして何処となく感心したような口調で  
そう言つた。

「戻るぞ、キアナ」

座り込んでいるキアナを立たせようとするかのように、旅団長が  
その手を差し出す。キアナをそれをぼんやりと見つめはするが、動  
こうとはしなかった。

「キアナ？」

眉を顰めてキアナを見つめる旅団長に、キアナはゆるゆると首を  
横に振つた。

「駄目だ、旅団長。わたしは、戻れない……」

やがて発せられた拒否の言葉に、旅団長はその目を見開く。

だが、その答えを半ば予測していたのだらう、それ以上の動揺は  
見せずに差し出した手を引つ込める。

「キアナ、我俣を言うんじゃない」

厳しい表情を浮かべ、旅団長はキアナに言い聞かせるように言う。  
しかし、キアナはその言葉に耳を貸そうとしなかった。

その言葉が正しい事は、キアナ自身がよく知っている。

第一、リーウはキアナがここへ戻って来る事も、ここに残ろうと  
する事も望んでいなかったに違いないのだ。  
それでも。

「わたしをここへ置いて行つて下さい」

「キアナ!!」

「わかっています、それがどんな意味を持つのか。そして…そうした場合、あなたの咎になるという事も。でも、それでも…わたしはリーウをこんな所に一人にしたくないんだ……!!」

ぎゅっと、リーウが残した服を抱き締める。その必死な様子とキアナの言葉に、旅団長はようやく肝心な事を忘れていた事に気付いた。

そう　　つい昨日この《聖地》へ捧げられ、一人残ったはずのリーウの姿が何処にもない事に。

「キアナ?　それで…そのリーウは何処にいるんだ。姿が見えないようだが」

旅団長の言葉で、同行していた男達も今気付いたかのように、周囲をきよるきよると見回し始める。

よく考えれば、一番最初に気付いてもおかしくない事実だ。しかし、彼等はすっかりその事を失念していた。

…その姿に、キアナは先程までの自分の姿を重ねる。自分の中からリーウを形作っていたあらゆる物が抜け落ちた、あの衝撃を思い出す。

「…捜しても無駄です。もう、あなた方だつてリーウがどんな顔をして、どんな声をしていたか覚えてないでしょう?」

「……!!」

キアナの冷ややかにも聞こえる言葉に、彼等は揃って息を呑む。

実際、その通りだったのだ。

集落はそれなりの人数の人間が暮らしていたが、全ての住人を把握出来ない程ではない。

第一、リーウとキアナの仲睦まじさは見ていて印象に残るものだった。まるで、本当に血を分けた姉弟のようだと。

…そう簡単に忘れられる類のものではないのだ。

言葉を失って立ち尽くす彼等に、キアナは小さく笑いを漏らす。

「そう…もう、この世の何処にもいない。リーウは、この太陽の化

身に全て食われてしまったんだから……！」

「キアナ、それはどういう意味だ」

「言葉通りですよ。わたしがここへ辿り着いた時には、もうリーウは消えてしまっていた。この 服だけをここに残して」

「…服？」

言われて、旅団長の目がキアナの抱える服に移った。それは確かに見覚えのあるもので、旅団長は表情を引き締める。

「 獣に襲われた可能性は」

「見てください、この服。綺麗なものでしょう？」

「……」

広げて見せられた衣服には、確かに牙や爪で引き裂かれたような跡も、そして血の染みすらもない。

「…もう何処にもいないんです。リーウはもう、この地上の何処にもいない……！！」

口にしてしまうと、今まで胸の奥底で燻っていたあらゆる感情が、出口を見つけたかのように一気に噴き出してきた。

それは為す術もなく奪われてしまった理不尽さへの怒りであり、あまりに無力で意気地のなかった自分への憤りであり、そして

大切な存在を永遠に喪った事への悲哀でもあった。

それ等全てが、キアナの中で混じり合い、明確な形となって表へと出て来ようとしている。

キアナの理性はその衝動に対して、咄嗟に待ったをかけた。それは告げる  そうする事は、恥ずべき事だ、と。

けれど、その勢いが止まる事はなかった。

## 涙（２）

「……どうしてなんだ……！！」

それは疑問の形を取る、絶望の叫び。

どうして、リーウは消えてしまった？

どうして、リーウが供物になるのを止められなかった？

どうして、自分は　いや、人々はこのような悲しい因習を平気で繰り返して来れたのだ！！

「こんな事をしたって、何も変わらない。太陽の光が無害になる訳じゃない！　ただ、悲しいだけじゃないか！　虚しいだけじゃないか！　後悔する、だけじゃないか……っ！！」

こんな事を言っても、リーウが戻る訳ではない。それはキアナにもよくわかっていた。けれど言葉は止まる所を知らず、次々に紡ぎ出されてゆく。

身体中の血液が沸騰でもしているかのように、熱が身体を駆け巡っている。

怒りなのか、それとも別の何かなのか。わからぬままにその熱は、更にキアナを興奮へと誘った。<sup>いざな</sup>

身体全体で訴えるキアナを、旅団の面々は居たたまれない顔で見つめている。

彼等もまた、拭いきれない罪悪感を抱いているのだと思うと、一層感情は荒れ狂った。　まるで、嵐のように。

もはや、自分が何を口に出しているのかすらわからない。

「こんなものを、被ったって……！！」

感情の昂ぶりに任せて、キアナは陽光を避けるように目深に被っていたフードを落としたかと思うと、バサリ、と地面に投げつける。そして、さながら陽光に対抗するように、毅然<sup>きぜん</sup>と面を上げた。

全てを白日の元に曝す光の下、キアナの美貌があらわになる。燃えるような瞳がキラキラと輝き、紅潮した頬は白い肌を一際映えらせた。

一瞬、旅団長達は目を奪われる。だが、すぐさま我に返ると、旅団長が慌ててキアナが投げ捨てたフードを拾い上げた。

「キアナ、なんて事を……！」

「早くフードを……！」

「ばか、死ぬつもりか……！」

口々に言いながら、蒼ざめる彼等を冷ややかに見つめ、キアナは止まる事を知らない言葉を重ねた。

「そう、わたしはこのままでいればきっと死ぬ。あの、太陽に殺される。……供物を捧げても、リーウを喪つてこんなに胸が痛くても！リーウの生命を捧げたって、いや……これから先どんなに多くの生命を捧げても、何も変わりはないんだ……！」

「わかった、わかったからキアナ！　ともかく、フードを被れ。お前に何かあったら、長も悲しむだろう？　リーウだって……」

「リーウが何ですか、旅団長。あの子が哀しむとでも？」

「キアナ……！」

無理にでもフードを被らせようとする手から逃れて、後ろに下がる。

手にしたリーウの服は手放さない。それは、この世に確かにリーウが存在していたという、唯一の証だからだ。

「リーウが哀しむのだとしても、痛くも痒くもない。目の前でリーウが哀しむ訳ではないのだから」

もし、今彼女を説得しようとするのがリーウ本人なら、きっとキアナは何も言わずに従ったに違いない。

否、むしろ今までずっと逆に自分がリーウを嗜<sup>たしな</sup>めていたのだ。その理由は唯一つ。リーウを喪いたくなかったから。

いつも笑って、側にいて欲しかった。それがずっと当たり前で、こんな風に喪ってしまうなんて思っていなかったのに……！！



「現実に存在しない者が嘆いても、声が聞こえる訳でも姿が見える訳でもない。なのに、どうしてそんな事を恐れなくてはならないのです？」

もし、消えてしまったリーウの魂のようなものが、キアナのばかな行為を嘆いて姿を見せてくれるというのなら、逆に嬉しいと思う。

そうすれば、きっと少なくともどんな姿をしていたのかは思い出せる。そして二度と忘れず、その面影を偲んで生きて行く事だって出来ただろう。

でも、現実には。

…リーウ本人がいなくなったばかりか、その存在したという事実すらも失おうとしている。

今ではもう、リーウの名くらいしかキアナの中には残されていない。大切な存在だったという、意識だけはちゃんと残っているのに。

第一 顔ももう思い出せないのに、哀しむ姿をどうして思い描けるだろう？

「リーウは過去のものにすらならず、存在自体が失われようとしている。いなくなって悲しいと思うのに、こんなにも辛いのに、その気持ちの行き着く先がない。こんな思いを抱えたまま、ただリーウの存在が消えるのを待つくらいなら」

そこでふと、言葉が途切れる。続けようと思うのに、喉の奥で絡まったかのように言葉になつてくれない。代わりに鼻の奥がツンと痛んで。

「待つ、だけ、なら……っ」

自分も消えてしまった方がマシ。

そんな風が続けようとして、けれどやはり言葉にはならない。まるで、自分の身体がそこから先を言うな、とでも言っているかのようだ。

そんな自分に困惑しつつ、更に言葉を紡ごうとした、その時。

（ あ ）

不意に、何かが目から零れ、頬を伝わり落ちる感触を知覚した。  
そして気付く 自分が、泣いている事を。

その事実を受け止める事が出来ず、今までの勢いは何処へやら、  
キアナは呆然と立ち尽くした。

そろそろと手を持ち上げ、自らの頬に触れ、そこに濡れた感触を  
感じて更に衝撃を受けた。

（ …泣いている。わたしが？ ）

頬を濡らす雫は、困惑するキアナを余所に、その目から次から次  
へと溢れて視界を滲<sup>にじ</sup>ませる。見守る人々もまた動揺しているのを感じ  
ながら、キアナはただ混乱した。

物心ついてからと言うものの、キアナは今まで泣いた事が一度とし  
てなかった。

それは次期長としての誇りからでもあったし、単に男勝りで負け  
ず嫌いの性格のせいでもあった。

痛みも悲しみも感じはしていたけれど、泣いてしまったら何かに  
負けてしまうような気がして、いつも我慢していたのだ。

それに いつしか自分が泣かない分、代わりのように泣いた  
り哀しんだりしてくれる存在が、身近にいるようになっていたから。  
だから、自分は泣かずにいられた。涙を忘れていられた。

（ ああ…そうか ）

更に絶望的な気持ちでキアナは思う。

（ もう、わたしの分まで悲しんでくれる人はいないんだ ）

だったら 自分が涙を流すしかない。

この哀しみに涙する事が出来るのは、この場ではキアナしかないな  
いのだから。

### 涙（3）

明るい陽射しの元、隠す事もなく零れ落ちるキアナの涙に、人々  
はかける言葉もない。気丈で男勝りなキアナが流すが故に、その涙  
は心を揺さぶる。

だが だからと言って、そのままキアナを見過ごす彼等でも  
なかった。

拾い上げたフードを手に、旅団長はキアナを刺激しないように気  
を付けながら、ゆつくりと彼女に歩み寄って行く。そして説得を試  
みた。

「キアナ。お前の哀しみはわかった。確かに：我々は今まで  
に何度も愚かな行為を行ってきた。だが、キアナ。今ここでお前が  
死んで、何になる？」

「……」

「リーウの死に殉じて、お前はそれで満足だろう。だが、遣される  
人間の気持ちも考えるんだ。：同じだろう、今のお前と。長や、お  
前の母親が、今のお前と同じ哀しみを いや、それ以上の痛み  
を得るのだぞ」

それは全くの正論で、キアナは反論する言葉もなかった。

久し振りに流す涙のせいもあったが、様々な思いが胸に詰まって  
苦しい。リーウを喪う哀しみを知ったが故に、敬愛する両親を同様  
に哀しませるという事実が重く押し掛かる。

黙り込み、ただ涙を零すキアナを、旅団長は幾分ほつとした顔で  
見つめ、手にしたフードを持ち上げた。

「さあ、キアナ：帰ろう」

旅団長の手にあるフードを見つめ、キアナは呆然と立ち尽くす。  
先程まであった感情の嵐は、涙の雨によって鎮まった。けれど  
心の奥はまだ諦めきれずにいた。

このまま、何事もなかったかのように帰っていいとは思えなかつ

た。

リーウを忘れ、この哀しみも忘れ、将来は長となり…そして何十年後には罪の意識もなく、リーウのような犠牲をこの聖地に送るのだろうか？

…それが正しい行いだと信じて。

「…駄目だ。そんな事、許されるはずがない……」

「キアナ？」

先程までの激しさこそなくなったものの、何処となく虚ろな目を向けるキアナを、旅団長は怪訝そうな声で呼びかける。

しかしキアナはその呼びかけを無視して思い浮かんだ言葉を紡いだ。

「旅団長、わたし達は今まで一体何人の《供物》を捧げてきたのでしょうか。罪もない子供が一体何人、ここで存在を奪われたのでしょうか。わたしはリーウを…いや、リーウ達を忘れたくない。ここを離れれば…きっと忘れる。忘れさせられてしまふ。だから」

「キアナ？」

「だから　わたしは、ここに残ります」

言い切ると不意に心が軽くなった。

その感覚に背中を押されるような気持ちで、キアナは再び光を取り戻した目を真っ直ぐに持ち上げ、狼狽する村の人々にきっぱりと宣言する。

「わたしの死で父や母が哀しむのは辛いけれど　わたしは、ここに残る。だからあなた方はこのまま村に帰って下さい」

「キアナ、いい加減にするんだ！　そんな事が出来る訳がないだろう…!!」

「何故？」

「何故、だと？」

一歩も退かないどころか、むしろ不思議そうに問い返されて、旅団長の顔が怒りに染まった。

「…お前を前にして、その我が侬を許し、むざむざ見殺しに出来る

と思っっているのか！？　こんな事をさせる為に、長も同行を許した訳ではないのだぞ！！」

「でも、わたし達はリーウを見殺しにしました。…それとどう違いますか。同じでしょう？　ただ、哀しむ人間がわたしには何人もいて、リーウにはわたししかいなかった、それだけの　！？」

キアナの反論は途中で途切れた。

キアナのフードを片手に、いつの間にか詰め寄ってきていた旅団長が、その手首を恐ろしい力で掴んだ為だ。

「は、離し……！！」

「キアナ、お前のそれは単なる屁理屈だ」

腕を取り戻そうとするのを遮るように、押し殺すような低い声で一喝し、旅団長はそのままもう片方の手に持っていたフードを、キアナの頭にばさりと被せた。

視界が遮られ、咄嗟にそれを払い退けようとしたもう片方の手も、動かす前に掴まれて動きを封じられる。

「嫌だ……ッ！」

「セダ、ネルト、押さえておくからこの我が俤娘をロープで縛れ！！」

旅団長は本気だった。このまま縛ってキアナの自由を奪い、村に強制的に連れ帰るつもりなのだ。

旅団長の指示に、名指して呼ばれた男達が近寄ってくる気配を感じ取り、キアナは恐慌状態に陥った。

このままでは為す術もなく連れ帰られてしまう。

忘れたくないのに。せめて最後の時まで、存在していた事を覚えていたいのに。

太陽に捧げられた多くの名も知らない、忘れられてしまった供物達…リーウの事を。

「やめろ、離せ　ッ！！」

両手を封じられたまま、キアナは足掻いた。

手を振り回し、旅団長の手から逃れようとする。

「っ、暴れるな！ お前達、早く！！」

フードが視界を邪魔して、周りが見えないが、旅団長が幾分焦っているのは感じ取れた。

腕力に差があっても、勢いはキアナの方にある。何より、キアナは必死だった。

「離　　ッ！！」

力任せに腕を振り回そうとした瞬間。

ぶっつん、と何かが切れるような音を聞いたような気がした。次いでぱらぱらと、身体に何か小さなものが当たる感触。

「…あ……？」

それが何であるのか　一瞬、わからなかったが、それによって旅団長が怯んで、掴む手の力が僅かに緩んだのがわかった。

そのまま腕を取り戻し、自由になった片手で視界を遮るフードを払い退ける。

…そして、ようやく何が起こったのかを理解した。

「　　」

唐突にキアナがおとなしくなっても、旅団長はもう無理矢理自由を奪おうとはしなかった。

彼等も荒れた地面に散らばったそれ　　木製の古びたビーズを、呆然と見つめるばかりだ。

それが何か、彼等もそれなりに察した為だろう、気まずい空気が生じた。

「……」

元々、繋いでいた糸も古かったのだ。暴ればこうなるのは仕方がない事だろう。

頭の中ではそんな風に理解出来たものの、キアナは拾い集める事も思いつけずただ呆然と散らばったビーズを見つめ　　そのま  
ま力尽きたようにべたり、とその場に座りこんだ。

…まるで、今まで張り詰めていた糸が、首飾りの糸が切れたと同じ時にぶつりと切れてしまったかのように。

「…リーウ……」

うわ言のように呟き、キアナはのろのろと手を伸ばして、一番近くにあったビーズを一つ手に取る。

…全部、なくなってしまう、と思った。

先程暴れた事で、リーウが最後に着ていた服も少し離れた所に散らばっていた。リーウに関するものが全て、キアナの手から離れて行く、そんな錯覚に囚われる。

「あ、あはは…ははははは…っ」

無駄なのだろうか。忘れたくない、としがみつく事すらも。いや、執着すればする程、遠ざかって行く気がする。

そう思うと、口から零れ落ちたのは虚ろな笑い声だった。

「ばか…みたいだ…ふふ…っ」

自分は何をしているのだろう。泣いて、暴れて　迎えに来てくれた人達を困らせて。

まるで小さな子供だ。願いが叶わないからと、駄々をこねる聞き分けのない子供。

でも、ならばどうしたら良かったというのだろうか？

（教えてくれ、リーウ…わたしは、もうどうしていいのかわからない……！）

その時だった。

「……？　地鳴り、か……？」

沈黙を破る事を恐れるような口調で、迎えに来た青年の一人がぼつりと呟いた。そして周囲の人間に確認を取るようにそれぞれの顔を見つめる。

その言葉に、そこにいた人間は無意識に耳をそばた敬て　そして彼等の耳にも、微かに何がしかの音が聞こえてくる事に気付いた。

ズズズ…、と何処か遠くから聞こえてくる音は、耳の錯覚でなければ彼等の足元から聞こえてくる。彼等は互いに顔を見合わせ、予想外の出来事にどう対応すればいいのか考えあぐねた。

ズズ……

ズズ、ズズズ……

やがてその音は次第にその大きさを増し、微かに地面を震わせ始める。

そして。

ドオオオオオオ………ッ!!

「ッ!？」

不意に耳を覆わんばかりの地鳴りがし、それと同時に激しく地面が揺れ始めたのだった。



## 目覚め（１）

……。

聞こえる。

音。言葉。声。

この声を知っている。叫んでいる…ひどく混乱しているようだ。

哀しみ。苦しみ。痛み。

伝わってくるのは、絶望。光を見失い、闇の中に立ち尽くす心が訴えている。

タスケテ。

…痛い。

もう痛みなど感じないはずなのに、痛い。

心が…痛い。

声の主の心の痛みに感応しているのか、それともまだ自分に痛みを感じる部分が残っているのか。

ドウシテイイカ、ワカラナイ……！

…泣かないで。

哀しまないで欲しい。

そんなに苦しむ必要は何処にもないんだ。

だから、泣かないで。

そんな風に哀しませたかった訳じゃない。君の涙なんて知らない  
ままで良かったのに　その涙は、ぼくのせいなんだね。

ごめんね。

哀しんでくれてありがとう。

…忘れないでくれてありがとう。

君に哀しんで貰える価値なんて本当は何処にもないのに。  
君がそんなに辛い想いを抱える必要なんて、なかったのに。

ごめん、そしてありがとう。

だから泣かないで                      キアナ。

+ + +

「まさか…地震!？」

そこから予想される最悪の事態に辿り着き、その場にいた人間で最も年嵩である旅団長の顔が青ざめた。

この星に彼等の先祖が移り住んで幾星霜。その間にこの星にはない自然現象の知識は薄れてしまった。

…地震はそれらの中の一つ。

どのようなものか、僅かなりと伝わっているものの、実際にそれを体験した者は一人としていない。ただ、大規模なそれが起こった場合、深刻な被害が起こり得るという事だけが伝わるばかりだ。

「…皆、逃げるぞ」

事態を重く見た旅団長の決断は早かった。

「旅団長？」

「逃げるって…何処へ？」

口々に困惑をあらわにする青年達を視線で黙らせ、口早に彼は告げる。

「逃げてても事態は変わらないかもしれないが、先行させた者達も心配だ。出来るだけ急いで合流しよう。もし混乱でも起こったら大変だからな」

そんな事を言っている間にも、揺れは激しくなる一方だ。その内立っていらなくなるだろう。

その事は同行した青年達も予想のつく事態だ。何より、過去何度も旅団の長を担ってきた彼の言葉には説得力があった。

彼等はすぐに力強く頷く。

「…はい！」

その場はにわかに緊張した空気に包まれた。

ズオオオオオオ…… オオ！！

地鳴りはさらに激しさを増し、揺れも強まってきている。旅団長は一人そこから取り残されて放心しているキアナに向き直った。

「キアナ」

「……」

呼びかけると、返事はないもののろろと顔が持ち上がる。その顔はと言えば、先程までの勢いも怒りも哀しみもない。

こんな非常事態だと言うのに、危機感の欠片もなかった。それは今までの快活で男勝りなキアナの姿からは想像の出来ない憔悴しきった姿で、旅団長の顔も曇る。

だが、時は一刻を争いかねない事態だ。彼は心を鬼にし、キアナの腕を掴もうとした。  
しかし。

ドオン！！

「ッ！？」

身体全身に叩きつけられるような衝撃が走り、激しく大地が波打ち始めた。

体勢を整える先から足元が掬われ、立っていらなくなる。転倒を避けてそれぞれが地面に張りつくように蹲ると、それを待っていたかのように揺れは激しさを増した。

「……！」

揺れが激しくなり、言葉を発する事もままなくなる。下手に口を開くと舌を噛む事は必至だ。

だが、揺れに絶え続けていた彼等は、やがてその目を大きく見開き、口を半開きにする羽目に陥った。その視線の先にあるのは。

「ひ、ひびが……ッ!？」

思わずといった様子で誰かが口走る。しかし誰もその事を気にも留めなかった。何故なら彼等の目前で、信じがたい出来事が起こりつつあったからだ。

それは、彼等が数日という期間をかけて旅をしてきたその目的地。人々が《聖地》と呼ぶそこに、長い年月を経て存在していた巨大な岩。それに異変が起こっていた。

激しい揺れの為か、それともそれ以外に要因があるのか 凹  
凸はあったが、傷などなかったその表面に亀裂が走って行く。

激しい地鳴りに隠れて音は聞こえないが、地面に接している部分から上に向かって縦へ、そしてその途中から枝分かれするように横へとひびが入って行く。

震動で碎ける、と彼等が思ったその時。彼らと同様に地面に座り込んでいたはずのキアナがいきなり立ち上がった。

「!？」

「な……？」

「ま、まで……っ!」

「……キアナ？」

慌てて彼女を止めようとするが、揺れが邪魔してうまく立ち上がれない。

そんな激しい揺れだというのに、キアナはそんな揺れなど感じていないかのようにふらりと歩き出した。

その表情は相変わらず心ここにあらず、といった風情だ。そして時折よろめきながらも、まるで操られるかのように今にも碎けてしまいそうな岩に向かって行く。

もしあの岩が碎け、その一部でもこちらへ倒れてきたとしたら。

…その近くにいる彼等も元より、そこへと向かうキアナが無傷で済むはずもない。慌てて引き止めようと旅団長は声も限りに叫んだ。  
「…キアナ！ い、…行く、んじゃ、ない……ッ！」  
舌を噛みそうになりながらも叫び、同時に立ち上がろうとするがうまく行かない。むしろ、この揺れの中で歩く事が出来るキアナが普通ではないのだ。

正に、神懸りのつかない様子がない。

そんな彼等の目の前で、キアナはついに今にも崩れてしまいそうな岩の元に辿り着いた。

そして…呟く。

「…リーウ……？」

その、瞬間。

岩に走った無数のひび割れから、突如激しい光が溢れ出した。

## 目覚め(2)

ある日、父さんが連れて来た男の子。

父さんの手に引かれて、その大きな背中に隠れるように立っていた小さな子。

着ていた服が大き過ぎて、余計に頼りなさそうに見えたから、何だか守ってあげなければならぬような気持ちになった。

それまで遊ぶとしたら年上の子供ばかりで、ずっと自分より年下の、それこそ弟や妹みたいな存在が欲しかったとか、そういう理由も確かにあっただろう。

けれどそれとはまた別の気持ちで、『守らなければならない』という意識を抱いたのもまた確か。

だから父さんがその子がうちの子になると言った時、本当に心の底から嬉しかったのだ。

自分の喜びを伝えたくて思わず抱きついたら、フードの下に隠されて見えなかったその子の目がはつきりと見えた。

驚きで大きく見開かれたそれは、微かな心細さが見え隠れしていた。

それまで、その子がどういう生活を送っていたのか、その子の家族がどうなったのか知らなかったけれど、その一瞬で理解出来た。

この子はずっと淋しかったんだ、と。

その証拠に、挨拶と一緒に笑いかけたら、その子もにつこりと笑ってくれたのだ。

とても嬉しそうに。…まるで、ずっとそうされるのを待っていたかのように。

そして、その子はわたしの家族になって。それからずっと、一緒に育った。

幼馴染よりは近くて、姉弟よりはちょっと遠い、でもかけがえない存在として。

…だから悲しい。

その存在が、存在したという事実すらも消し去って失われてしまったという事が。

もし、引き返さなかったら…そのまま忘れ去ってしまったかもしれない事が。

大事な存在だったはずなのに、忘れていたかもしれない。それが許せない。

大切な存在だったからこそ、忘れたくはない。こんな終わり方があっていいはずがない。

…せめて、この気持ちは奪い去らないで欲しい。

喪った哀しみも苦しみも、全部自分のものだ。誰の物でもない、自分が感じて自分が背負ったもの。

それがいかなる存在だろうと　たとえば、それが『神』と呼べるものであると　奪い去る権利は何処にもない。

そんな当たり前の事すら許されないと云うのなら…こんな世界は、滅んでしまえばいい。

そもそも、この大地に人が生きている事自体が間違いなのだから。

+ + +

ふと目を開くと、キアナはやわらかな光の中にいた。

はっと我に返り、弾かれたように身を起こし　　呆然と周囲を見回す。

その光は世界に満ち溢れ、太陽のように降り注ぐ訳でもなく、全身を包み込むように四方八方から照らしてくる。けれど不思議と眩しくは感じられない。

(ここは……?)

前後の記憶が曖昧で、これが夢なのか現実なのかもよくわからなかった。

…いや、これが夢なのは確かだろうが、何処から何処までが夢だったのかわからなかったと言うべきだろう。

旅団の一員として聖地へ旅だった事も、リーウを供物とする為にそこに置き去りにした事も、それ以前にリーウが供物となった事さえも、いつそ夢であればいいのに、と思う。

だが　そう思う事自体、それが現実であつた事を裏付けるようなものである事もキアナは気付いていた。

そろそろと立ち上がる。ぼんやりとした光が満ちるばかりで、明確な足場が目に見える訳ではないので、自然とその動作はぎこちないものになってしまう。

その動作の間にも、キアナの頭の中は今までの事を思い出そうと忙しく働いている。

完全に立ち上がった時には、地震が起こった事、そして周囲が騒ぐ中確かに自分を呼ぶ声が聞こえた事を思い出していた。

そう…聞こえたのだ。

哀しみで空っぽだった自分の中に、何処からともなくその声は届いた。

『泣かないで』

キアナ』

それはもうすでに記憶から消し去られていたはずの声で。だから誰かなどわかるはずもなかった。

それでもキアナはそれが誰のものか直感的に理解した。その声をもっとはつきりと受け留めたくて、その声の源を探して　あの、今にも砕け散ってしまいそうな岩で目が止まったのだ。

そして　……。

「…リーウ？　ここに、いるのか……？」

無人の空間に呼びかける。

非現実的な行為である事は百も承知だ。けれど、そうせずにはいられなかった。



「いるのなら応えてくれ。…いるんだろう？」

それが何処から来る確信なのか、キアナにもよくわからなかった。それでもそうする事に違和感はない。そうすべきだと心の何処かが告げている。

「リーウ？ 姿を見せてはくれないのか……？」

たとえ実際にその言葉に従って『リーウ』が目の前に現れたとしても、キアナにはそれがリーウであるかどうか、はつきりと断言出来る自信はない。

それでもどうしても会いたかった。もう一度その姿を見て、今度こそしっかりと脳裏に焼き付けたかった。

…もう二度と忘れないように。

幾度か呼びかけ、しかし応える声はなく長い時間が過ぎ去った。

空白の記憶に唯一残るその名を呼ぶ以外、キアナに出来る事は他になく、呼びかける方向を変えては名を呼ぶ。

そうする内に、キアナの中に穏やかな気持ちが戻ってきた。

目覚めた時に落ち着きを取り戻したようでも、実際にはまだ混乱していたのだ。その証拠に、随分長い事、キアナは共にいたはずの旅団長達の事を忘れ去っていたのだから。

ようやく彼女はその事実に関心、そして一つの可能性に気付いた。

「…もしかして、わたしは死んだのか？」

実際に口に出してみても、その可能性を今まで思いつきもしなかった自分に苦笑した。

こんな光ばかりしか見えない場所にいる事自体、その証明のようなものではないだろうか？

死後の世界など当然知るはずもないし、本当にそうかなど問われても答えられないが、思い返せばその可能性は極めて高い。

ふと思いついて身体を見れば、怪我もないばかりか、服には汚れ所が乱れ一つなかった。…あれだけ無様な醜態を晒して、膝や手足は土で汚れていたというのに。

「……」

そうかもしれないと思いはしたものの、それでもキアナは何処か納得しきれずに顔を顰めた。

どうしても死後の世界というよりは、夢の中という感覚が拭い去れないからだ。

頬でも抓<sup>つま</sup>ってみるかと思いつき、指を頬に伸ばしたその時だ。視線の先に、いつの間にか一人の人間が立っている事に気付いた。

「……リーウ……？」

半信半疑で呼びかけると、その人物は首を横に降った。

『いいえ。わたしは「リーウ」ではありません、キアナ』

答えるその人物は、キアナとそう変わらない年齢の青年の姿をしていた。

普通と違う所があるとしたら、髪も瞳もまるで草や木の葉のような緑色をしている事と、口を開かずに言葉を伝えてきたという事だろう。

服は上下とも白で、飾り気というものは一切ない。そのせいで、彼の緑色の髪は周囲の光も手伝って余計に際立って見えた。

明らかに普通とは言いがたいその姿と声に、しかしキアナは不思議と気味が悪いとも変だとも思わなかった。

ただ、彼が『リーウ』ではないとするなら、一体何者なのかという疑問を強く感じはしたけれど。

青年はキアナのその疑念を見透かしたように薄く笑みを口元に浮かべると、その片手を持ち上げ自分の胸に当てると自らを明かした。『まずは初めまして。私はあなた方が《聖地》と呼んでいた場所にあった岩……その精神体です』

### 目覚め(3)

「…精神…体…？」

『はい。あなた方にはただの巨大な岩に見えていたようですが、実際にはそうではなく…一つの生き物なのです』

「…生き物だつて……！？」

全く予想外の言葉に、キアナは驚愕を隠せなかった。

何処までも続く荒野にぽつんと一つあった巨岩      あれが自分と同じ生き物だとは到底思えない。

一瞬、岩に口や手足の生えた姿を想像し、そのグロテスクさにキアナは慌ててその想像を追い払った。

「い、生き物つて…本当なのか？」

『ええ。嘘や冗談を言っていると思うかもしれませんが…そんな必要は何処にもないでしょう？』

「そ、それは…そうだけど……」

それでもそう簡単に納得出来る話でもない。

あの岩には直接触れもしたが、ごつごつとした表面と言い、堅さと言い、岩以外の何物でもなかったように思う。

しかし、青年はその事についてそれ以上説明する気はないようだった。キアナの困惑をそのままに、一方的に話を進めて来る。

『キアナ。あなたは「リーウ」が消えた事を哀しんでくれた』

「…！」

青年の言葉に我に返ると、キアナはようやく一つの事実を思い出した。

目の前にいる青年が、太陽の化身として扱われていた岩の精神だと言っのなら、つまり彼こそが彼女から『リーウ』を奪い去った存在なのだという事を。

瞬時に湧きあがった激情を寸での所で抑え、キアナは相変わらず友好的な微笑みを浮かべる青年を睨みつけた。

『…今まで幾人もの《供物》がここに捧げられましたが、そうしたのはキアナ、あなたが初めてだった。だから……』

青年は胸に当てていた手をキアナに差し伸べたかと思うと、有無を言わさない口調で告げる。

『手を、キアナ』

「手、だつて？」

いきなり何を言い出すかと思えば、青年は至極当たり前のように言葉を重ねてくる。

『知りたいでしょう？ そうすれば全て伝わる』

その言葉に、先程は耐えた激情が再び頭をもたげた。

「そうやって、一体何が伝わるって言うんだ……！」

ばかりにされているような気さえた。

相手は恐らく人ではない。ならばきつとその価値観も違うのだろう。そうとも思わなければ、こんな態度を取れるはずがない。

「今更…一体何をわたしに伝えようって言うんだ！？ リーウを…存在した記憶すら残さずわたしから奪い去っておいて……っ！」

『その事についてです、キアナ。あなたは誤解している…いえ、この地上に生きる人々は何一つ知らないし、今までは知る必要もなかった。でも…キアナ、あなたには伝えるべきでしょう。「リーウ」が消えた事を哀しんでくれたあなただからこそ……』

言いながらも、青年はゆっくりとした足取りで歩み寄って来る。

差し伸べられた白い手を無意識に凝視しながら、キアナは言われた事を整理しようと必死に頭を働かせた。

（…誤解？ 一体何を誤解していると言うんだ？ 知る必要もないって…どういう意味なんだ？）

考えれば考える程、混乱は深まるばかりだ。

ふと気がつくと、青年がすぐ触れられそうな場所にまで近付いていた。

「……！」

反射的に後ずさるキアナの腕を、青年の手が一瞬早く捉える。

その手は見た目よりもしっかりとしていて、力強い。瞬間感じた恐怖に身を竦ませるキアナに、青年は初めて見せる自嘲的な苦笑を浮かべると厳かに告げた。

『教えましょう…《供物》とは一体何だったのか、私が何なのか…全てを』

「…！？」

その言葉を言い終わるや否や、キアナの中に自分のものではない存在の記憶が流れ込んできた。

それはまだ人々が地上に降り立って間もない頃、空から飛来した《太陽の化身》の記憶だった……。

+ + +

それは随分長い時間、暗闇の中を漂流し続けていた。人の時間では計り知る事も難しい、膨大な時間をたったひとりで。

『彼』はずっと探し続けていた。

自分が生きて行く場所 根付く場所を。

それは一見した所、まるで隕石のようにしか見えなかったが、実際は生き物だった。

手足はなく、口や鼻、耳といった感覚器も、思考する脳といったものさえ、何一つ備えていなかったけれど。

それでも彼には『心』があつたし、『願い』や『夢』も持っていた。

彼の願いは、この旅の終着地点が一日も早く見つかる事。

彼の夢は、いつか辿り着いた場所で『本来の姿』になる事。

真空状態でも耐えられる外殻に守られ、彼はその内でただ時が訪れるのを待続けた。

そして彼はようやく星の海の中から、彼が根付く事が可能な星を見つけたのだ。

+ + +

『…私達は宇宙を渡り、惑星に根付く生物。けれど、その根付く事が可能な場所は、この広い宇宙には一握りほどしか存在しない』

何処からか声が届く。

それが、あの太陽の化身の精神体のものであると気付くのに少し時間がかかった。

それだけキアナの心は流れ込んできた記憶に囚われていたのだ。その記憶にあったのは、何処まで続くのかわからない孤独と、ほんの小さな希望。

それをまるで自分の身に起こった事のように感じた。

『ほら、これが私達が今存在している惑星です。草原と荒野の斑模様が見えるでしょう』

声と同時に、漆黒に染まった脳裏に緑と赤茶の斑模様の球体がふと浮かび上がった。

『…ここに辿り着くまでに、一体どれだけの時間を必要としたのか、もう私にもわかりません。でも、だからこそ…私は表現出来ない程に喜びを感じました。「願い」が叶った事で、今度は「夢」も実現出来るのではないかと』

再び視界が暗転し、次は何処までも広がる荒野が浮かび上がる。

それは何処か見覚えのある光景で      しばらく考えてそれがあの《聖地》である事に気付いた。

『しかし…私が「本来の姿」になる為には、唯一にして重要な条件がありました。それは……』

「      外部との交感……」

無意識の内に口にして、キアナは我に返った。

余程深く青年の記憶に潜り込んでいたらしい。彼の代わりに言葉の続きを口にするほどに。

我に返った今、もう先程まで自分を支配していた《太陽の化身》

の記憶の支配はない。

けれどその名残は色濃くキアナの内に残り、もはや青年を一方的に非難する事は出来なくなっていた。

あの、何処までも続く漆黒の空間。あの中でたった独りで漂う、気の狂いそうな孤独感を疑似体験してしまっでは。

『そうです。どうしてもそれが必要だった。それがなければ私達は真実、目覚める事が出来ない。…外界との交感がなければ。何故なら私達は、根付く場所の生き物の波動と感応する事で成長する生き物だったから』

「…その為に、『供物』を？」

『ええ…この星に私と意識を交わせる生命体がいる事はわかっていましたから。…まさか彼等もまた、私と同じようにこの星に辿り着いた流民だとは思ってもみませんでした』

くすりと青年は笑い、いつの間にかキアナの手首から離していた手を持ち上げると、そこに視線を落とした。まるでそこに大切な何かがあるかのような、何処か穏やかな表情で。

## 目覚め(4)

『この星へと辿り着いた時、異変を知った人々が確認しにここへやって来ました。私は喜び、彼等と交感しようと思いました。しかしその時、私は彼等の思考を読み取り、私に対して畏怖の念を抱いている事に気付いたのです。そして彼等が元々この星の住民だった訳ではなく、その為に完全に適応出来ていない種族である事も。…彼等の心の中は不安と困惑ばかりで、とても私の存在を受け入れてくれる余裕などなかった。だから……』

「…利用する事を、考えた？」

『…はい。彼等は生きる事にただ必死で、それ以外の事は二の次でしたからね。疑って精神をすり減らすよりも、信じてしまう方が楽だったでしょう。…私を《太陽の化身》だと思いこませる事は思った以上に簡単でした』

再び顔を上げると、青年は悪戯っぽい笑みを見せた。

けれど、利用された側であるキアナにしてみれば、とても笑える内容ではない。

「ここに人を呼ぶ為に、《供物》の必要性を人間に刷り込んだ訳か」  
『正確には少し違いますが、まあ、そういう所です。…私はただ、知りたかっただけなんですが』

「…何を」

『人間がどんな価値観を持っていて、どんな善悪を持っているのか。…人というものを理解したかった』

「理解だった？」

何を言い出すかと思えば、と青年を見れば、相変わらずの笑顔の中、その目だけは真剣だった。

明るい緑の瞳は真実を告げているのだとキアナに教える。だが、それが真実であるとしても、キアナにはどうしても納得出来ない部分がある。



人を知る為　　その為に《供物》を捧げるように仕向けたのなら、その《供物》となるものを同じ人から出させたのは一体何故なのか。

切っ掛けに過ぎないのなら、草原に生きる獣であってもかまわな  
いはずだ。もしそうなら、キアナだってもっと彼に対して友好的な  
感情を抱けたに違いないのに。

すると、キアナのそんな思いを見透かしたように、青年は言葉を  
重ねた。

『《供物》は人の善悪を量る為の、言わば試金石です。自らが生  
きる為に同胞を犠牲にする事を良しとするなら、それが彼等の正義  
…そうでしょう？』

「そんな……！」

『違うと言えますか？　事実、今までずっと人々はここへ《供物》  
を捧げに来ました。産まれたばかりの赤ん坊、物心つくかつかない  
かの子供…自力では生きて行けないような弱い存在を』

「……っ」

『…だから私は随分長い事、人というものは愚かで残酷な生き物な  
のだと認識していました』

痛い所を突かれたと思った。

確かに青年の言葉に嘘はない。キアナだって、リーウが《供物》  
になる事がなければ、気の毒だとは思いつつも《供物》の存在を黙  
認していたかもしれないのだ。

けれど…それでも簡単に頷きたくはなかった。

「でも…！　それだけじゃ、ない……！」

確かに人にはそういう面はあると思う。

でも、リーウを喪ってキアナの胸が痛んだように、哀しみを感じ  
る心を人は誰しも持ち合わせているはず。

「確かに人は…自分を一番に考えがちな生き物だ。でも…、それで  
も哀しみを感じるし、痛みだって感じる！　《供物》だって…必要  
だと思っていたからやっていただけ、決して進んでやりたかった訳

じゃない！」

反論を口にして、ふと思い出したのは家族だった。

旅団に参加するという我が俣を、最終的には許してくれた父。リーウの決意を知って、せめてと寝る間も惜しんで晴れ着を仕立てた母。

彼等は確かに血の繋がらないリーウという存在を、家族同様に愛していたと思う。

引き返してリーウを連れて逃げようなどという無謀な行いをしたキアナを、迎えに来てくれた旅団長達。

旅団の長であるという責任もあつただろうが、もし本当に人が愚かで残酷なだけの生き物ならきつと見捨てているはずだ。

…それだけではない、絶対に。

誰にだって、きつと喪いたくない『何か』が存在するだろうし、その為にならきつとどんな無茶だってすると思う。

キアナがリーウを心の中から完全に切り捨てられなかったように。

「人間は、そこまで残酷な生き物じゃ……！」

「…わかっています、キアナ」

「え……？」

反論にかえってきた声は、やはり穏やかだった。虚を突かれて、キアナはそれ以上の言葉を失う。

「人は決して、愚かで残酷なだけの生き物じゃない。…わかっています」

先程、人間を非難するような事を口にしたのに、その口調は明らかに親愛のこもったもので、キアナは益々混乱する。

そんな彼女の様子にくすりと笑いを漏らすと、青年はぼつりと呟いた。

「…だからこそ、私は諦めがつかなかった」

「あきら……め？」

「そう…確かに人に《供物》を捧げるように仕向けたのは私です。人からすれば何様とも思える所業でしょうが、私もまた生き物です。

…だから諦められなかった。このまま朽ち果てるのはあまりにも耐え難かった。だから……」

青年はそこで一度言葉を切り、少し迷う素振りを見せた。

その素振りがあまりにも人間臭くて、キアナは何だか違和感を感じて首を傾げた。いや、違和感というよりは既視感だろうか。

少し言い辛い事があると、口籠もり少し視線を反らす。何だか…その素振りを、何処かで見たような気がして。

その既視感が何処から来るのか突きとめる前に、青年は再び口を開く。そして、やはりキアナの想像を超える事を口にしたのだった。『だから何度も《供物》を人の中に送ってきたんです。彼等が…ここへ必ず訪れるように』

「どういう…事？」

青年の言葉はあまりに理解を超えていて、キアナの思考はうまく働かなくなっていた。

今の言い草だと、今まで捧げられてきた《供物》は全て彼の作り物か何かのようだが　　そんな事が可能だとはとても思えなかった。

「人の中に送ってきたって、どういう意味なんだ」

『言葉通りですよ、キアナ』

「言葉通り、って…それじゃわからないから聞いているんだろう!？」

動揺を隠さずに詰め寄ると、青年は少し困ったような顔をした。

出来れば説明したくはない　　そう思っているのかもしれない。

しかし、ここで見逃してやるつもりはキアナにはなかった。

「全部説明してくれ。一体…《供物》って何なんだ？　お前に捧げられた生贄じゃなかったのか？」

『…わかりました。全部話しましょう。元から…あなたには話さなければならぬだろうと思ってはいた事です』

そして青年は、静かに話し始めた。

## 光の子（１）

『あなた方が《供物》と呼び、この地へ捧げてきた子供達  
等は全て正しい意味では人間ではありません』      彼

「人間じゃない……？」

『そう…彼等は私が作り出した幻像。私の分身のようなものと言った方がわかりやすいでしょうか』

「そんな…！ 幻像…つまり、幻だったって言うのか！？」

とてもではないが信じられなかった。

確かにリーウの記憶が奪い去られた今、その言葉を完全に否定出来るだけの裏付けはない。それでも、長い間共に在り、共に育ったという事実が青年の言葉を信じさせようとはしなかった。

それとも…一緒に育ったという記憶自体も幻で、本当はリーウなんて存在は実在しなかったのだろうか？

だから…こんなにも根こそぎ記憶が抜け落ちてしまえたのだろうか。

「信じられない…そんな事、信じられる訳がない！」

『……』

「本当にリーウが存在していなかったというのなら、どうしてこんなに苦しいんだ？ どうしてこんなに悲しみを覚ええないとまらない！？ 幻だったなんて…そんな事……っ！」

『確かに彼等の存在は偽りでした。でも…あなた達の間に存在していたのは事実。だからあなたが悲しむのは決して不思議な事ではありません、キアナ』

全てを否定されたような気持ちでいたキアナは、その言葉に目を見開いた。

「え……？」

『幻像、という表現を使ったのは間違いでしたね。でも実際、それ以外に表現のしようがなかったのです。《供物》と呼ばれ、この地

に捧げられてきた子供達は全て私が作り出し、人々の間に送り出したものなのですから』

「ちよつと待て…じゃあ、それじゃあ、今までわたし達は…自ら《供物》を選んでここへ捧げてきた訳ではないという事なのか…？」  
言いながらもキアナの頭の中は混乱する。

人間の性質を見極める為の試金石だった《供物》の存在すらも、彼の差し向けた偽りの存在なのだとしたら。

「わたし達は、結局の所…何一つ犠牲にしてはいないという事…？」

『そういう事になりますね。何しろ…《供物》は最初から人に似せてあるだけで、存在してはいても、本当の意味でそこに実在している訳ではありません。だから…役目を終わると、その存在は最初そうだったように「無」に還り、人々の間からは同時にそれと関わったあらゆる記憶も消えてしまうのです』

「どうして…何故、そんな事を…？ 記憶まで消す必要なんてないじゃないか」

『言つたでしょう、キアナ。私の目的は…夢は、この地に根付く事。それにはここに生きる存在に受け入れられなければならない。…キアナ、あなたは自分をどんな理由があつたとしても利用した存在に、心を許す事が出来ますか？』

「それは……」

出来るか、と聞かれてすぐさま頷ける事でもなかった。

答えに困るキアナに、青年は続ける。

『出来ないでしょう？ だから…記憶まで消すようにしたのです。卑怯なのは承知の上です。それでも…私は、人に嫌われるような事にはしたくなかつた』

青年はその緑の瞳を真っ直ぐに向けてくる。そこにある深い渴望に初めて気付き、キアナは息を飲んだ。

それは…生き物が生まれつき持っている本能 生きたい、という気持ち。

『私は自分一人だけでは生きてゆけない存在。だからこそ、人という存在に希望を抱かずにはいらなかった。…ずっと待っていていました。寄る辺のない存在に対しても、心を砕いてくれる存在が、いつか人の間から現れてくれる事を』

そして青年は、どういう顔をしているのかわからないまま立ち尽くすキアナに、例の穏やかな微笑を向けた。

『キアナ、あなたのような人が…現れてくれる事を』

その笑顔は、キアナの記憶から抜け落ちた記憶を呼び起こす。

喪う事が辛くて、無茶な事までして取り戻そうとした。何事もなければ、ずっと傍にあると信じていたかった誰かの。

「…リーウ？」

誘われるように呟いたその瞬間、視界は不意に暗転した。

+ + +

「…アナ…キアナ、しっかりしろ！」

すぐ側で聞こえた声は何処か切羽詰ったもので、キアナは驚いて目を開いた。

「……？」

「キアナ！ 良かった、気がついたな。何処か怪我はないか？」

目の前にいた年嵩の男がほっとしたように声をかけてくる。一瞬、それが誰なのかキアナにはわからなかった。

「…旅団長……？」

実際に口にしてようやく現実を認識する。

何だかとても長く長い夢を見ていたような気がする。まだ心の何処かがその夢に囚われているかのように、何処か現実感が戻りきれていない。

そろそろと身を起こして周囲を見回し　そしてそのまま呆然となる。

というのも　そこに、キアナの想像を遥かに絶する光景が広が

っていたからだ。

「これは…一体……？」

空が緑色の何かに覆われている。

その隙間から覗く青は遥かに遠く、それが本来の空である事に気付くのにしばらく時間がかかった。

それまで地平まで続いているように見えていた荒野はすっかり様変わりし、起伏に富み、所々に茶色の岩のようなものが見えている。ふと自分が横たわっていた地面を見れば、そこはざらざらと独特の質感のある、土とはまた違う何かに変わっていた。

「木だ、キアナ」

「…木？」

「ああ。…後ろをしてみる」

「後ろ……」

言われるままに身体を捻って背後を見たキアナは、そのまま固まった。

事態が全て飲み込めただけでなく、あまりの非現実さに言葉を奪われた為だ。

「…木、だ……」

ようやく言葉が出たと思えばそんな間抜けなものだった。

しかしそれ以上、何が言えただろう。

視界を覆って余りある大木が、すぐ背後に聳<sup>そび</sup>え立っていたというのに。

## 光の子(2)

「一体これは……？」

目前にある現実をいまいち認識出来ずに、キアナは旅団長に尋ねかける。

元より明確な答えが返ってくるとは思ってはいない。それでも自分以外の誰かに説明を求めずにはいられなかったのだ。

「私にも実際の所、何が起こったのかわからんよ。あの岩が砕け散った瞬間、意識を失ってしまったようだ。目が覚めたら《聖地》だったはずの所から巨大な木が生えていて、周囲にお前達がばらに倒れていたんだからな」

「……」

では実際、その時何が起こったのか誰もわからないという事だろう。

納得出来るはずもなかったが、それ以上追及しても仕方がない。

キアナはため息をつく、と、ゆっくりと立ち上がった。

視点が移動しても、目の前の木はほとんど印象を変える事はなかった。天高く聳え、さながら天を支えるように枝葉を伸ばしている。それがこの地上に生えるどんな木とも違うのは確かだった。少なくとも、いきなりこんなに育つ木があるとは思えない。

もしかするとこの《聖地》にあった巨石は、この木の種か何かだったのだろうか。

そんな事をふと思いつき、キアナは一人苦笑を浮かべた。いくらなんでもそれはあまりに突拍子もない事のように思われたからだ。

そんな事を考えている間に、キアナ以外の人々は全員大きな怪我もなく無事に目を覚ましたようだった。

彼等は一様に突如現れた巨木に茫然自失となったが、だからと言って何が出来るといふ訳でもない。それぞれの無事を確かめ合うのが済むと、誰が言うまでもなくその場を後にする準備を始めた。



「他の奴等も心配だ。急いで合流しなくてはな」

そんな旅団長の声に反対する声はない。

まず旅団長が歩き始め、ついで数人の青年達が歩き 最後

キアナもその後続く。

ざわざわ、と葉が上で音を立てていた。ふと見上げて、キアナはある重大な事に気づいた。

「……あ！」

思わず声を上げ、その声で先行していた人々も立ち止まり、何事かとキアナに目を向けたくる。

彼等も気付いていない その事実気付くと、キアナは声大にして気付いた事実を指摘した。

「フード！ フードを被らなくては！」

そう、彼等の誰もが日差しを遮る為のフードを被るのを忘れていたのだ。

場合によつては命にも関わるというのに、どうしてこんなに大事な事を皆が忘れていられたのか、キアナは困惑した。

自分で脱ぎ去った自分だけならともかく、そんな無茶な行為を先程は大慌てで止めた彼等とは思えない悠長さだ。

しかし 返ってきた視線といえば、何故そんなにキアナが慌てるのかわからないといった様子のもだった。

「……みんな？」

何故彼等がそんな目をするのかわからずに混乱するキアナに、一番最後に歩いていた青年が少し呆れた口調で言った。

「キアナ、いきなり何を言い出すんだ。そんなものを被る必要はもうなくなつたはずじゃないか」

「……え？」

「この木が陽差しを遮ってくれているから、この木の下にいる限りは地上にまで有害な光は届かないって、昔話で聞かなかったのか？」

「……昔話？」

キアナは首を傾げた。そんな話など今まで聞いた覚えがない。

けれど、彼等が嘘を言っているようにも見えなかった。まるでそれが当たり前のような　　普段、集落にいる時のような屈託のない笑顔を向けてくる。

「キアナ、いくらなんでもボケるには早いんじゃないか？」

その言葉に、キアナ以外の全ての人間が笑ったが、キアナとても笑える心境ではなかった。

何かがおかしい。

自分以外の人間の中身がすっかり入れ替わってしまったかのよう  
な不気味さを感じ、キアナはひやりとしたものを感じた　　が。

その瞬間、彼女は目を見開いた。

まるで光が閃いたように脳裏に甦った一つの映像。上か下かもわからない場所　　そこに立つ、一人の青年。

そう言えば目が覚める瞬間まで、夢を見ていた。

その中にこの青年が出てこなかっただろうか。そして…。

キアナは、全てを思い出した。この《聖地》にまつわる秘密  
そこに隠されていた真実を。

「いくら《聖地》参りが次期・長になる者の必須行事だからって、  
一人で先に突っ走ってこんな所にまで来るからだ。疲れているんじゃないのか？」

からかう口調で旅団長が言う言葉に、キアナは居心地の悪さを感じ  
ずにはいられなかった。けれどもう、そこに恐れは抱かない。

…何が彼等に起こったのか、すっかり理解したからだ。

「……」

キアナは立ち止まり、背後を見た。

そこに聳え立つ巨木は、まるでキアナの背を押すようにその枝を  
揺らしている。そこを軽く睨み付けて、彼女は苦笑を浮かべた。

「…そういう事に、したのか」

当然、その言葉に返る言葉はない。けれどキアナは確信を強めた。  
これは《彼》が為した事。遠い昔に、人々に《供物》を捧げるよ  
う仕向けたのと同じように、今度は別の記憶を刷り込んだのだ。…

《供物》という悲しい因習にまつわる記憶と引き換えに。

人を何だと思っっているんだ、と思うし、多分、全てを知っているキアナは怒ってもいいはずだ。

なのに 何故か胸に湧き上がるのは『仕方ないなあ』という気持ちなのだった。

強かだと思う。

そして 敵わないと思う。

これがもし、人間にとって不利な事ならいくらでも怒れるし、詰<sup>なじ</sup>る事だつて出来るのに。けれど《彼》が行った行為はある意味、人の為になる事なのだ。

…旅団長達のあの、晴れやかな顔。

《供物》を捧げる為にここへ旅してきた時は、笑っていても何処か心の底では笑ってない感じが付き纏っていたのに、今は心の何処にも後ろめたさのない顔をしている。

今までマイナスのイメージが強かった《聖地》の持つ意味が逆転した事で、今までにない前向きな明るさが人々の中にもたらされたのかもしれない。

《彼》は目覚めた。枝葉を広げ、地上を包み そしてこれからも人々を陽差しから守る事だろう。

その恩寵がどんなに大きなものか、そしてそれがどんなに奇跡的な事なのか、キアナだけが知っている。

「キアナ？ どうした」

先行する人々が、一人立ち止まっているキアナに気付いて声をかけてくる。

「ほら、帰るぞ！」

「置いて行かれてもいいのか？」

口々に。

そこから伝わるのは、親愛の感情。

それを背で受け止めたキアナは、一度目を閉じ、心の中で呟く。

(…ばかだな、お前は。どうせなら、もっと恩を売ればいいのに)

記憶の改竄はどうかと思うが、《彼》の目覚めによって人々が死の恐怖から遠ざかったのは確かな事。もっと、その重要さを主張してもいいような気がした。

でもこういう変な所で控えめな辺りが、《彼》の生きる為の策略なのかもしれない。

（まあ、いい。わたしが：覚えているからな。少なくともわたしが生きている限り…真実は消えない）

たとえ、他の誰もが忘れ去ってしまっても。

《彼》がキアナからはその記憶を奪わなかったのは、もしかしたら忘れて欲しくないという意味表示なのかもしれない。そう思うと、キアナの顔に知らず微笑が浮んだ。

ゆっくりと目を開き、最後にもう一度目に焼き付けるように巨木を見つめる。次にいつ、ここに来れるかわかったものではないから。

その最中、キアナはその目を大きく見開いた。

天高く聳える幹の途中、太い枝の付け根の辺りに人影が見えた。

夢の中で出会った青年かと一瞬思ったが、それとはまた違う。もっと小柄な。

「リーウ…!？」

遠目でははつきりとした顔かたちまではわからない。それでもキアナがその名を口にした時、確かにその人影は小さく手を振ったように見えた。

それはほんの一瞬のこと。瞬きをした後にはもう何も見えなかったけれど。

「ばか……」

最後の最後まで、憎たらしい事をやってくれる。

本当に 敵わない。

「キアナ！ 本当に置いてゆくぞ!？」

「わかってる!」

反射的に浮かびかけた涙を振り切るように叫び、今度こそキアナ

は巨木に背を向けて少し先で彼女を待つ一団向かって駆け出した。

これは、別離であって本当の別離ではない。キアナはこれからも生きてゆくし、《彼》はおそらくキアナの何倍も何十倍も生き続ける事だろう。

生きているなら、また会える。

姿形が変わろうと、種族が違おうと      会いたいと思う気持ち  
が変わらない限りは、きっと。

そしてキアナは二度と振り返る事もなく、迷いのない足取りでその地を後にした……。

## 永遠に（１）

「長ー！」

「キアナさま、大変ー！」

「大変だよーっ！」

ぶんぶんと手を振り回しながら、子供達が駆けて来る。

彼等がそんな風に『大変』と言いながらやって来るのはいつもの事だった為、キアナは慌てず騒がず、落ち着き払った顔で彼等を迎えた。

「どうした。今度は太陽でも空から落ちてきたか？」

からかうように言っていると、息を切らせ走ってきた為か、それとも興奮の為か、赤く紅潮した顔の子供達は大袈裟な位に一斉に首を横に振る。

年の頃は、上は十、下は五つほど。そうした仕草は端で見ていると微笑ましい限りなのだが、本人達にとってはそれどころではない。

「長、笑い事じゃないんだって！」

明らかにむつとした様子で、子供達の中でも一番年上でリーダー格の少年が言い、他の子供達も同意を示すようにうんうん、と頷く。

この間の『大変』は、今まで見た事もないような植物が咲いていた事だった。

その前のは、集落の家畜に子供が産まれた事。

前例が前例だけに、子供達と同じような危惧感など抱けるはずもない。

「わかった、わかった。一体、何があった？」

それでも笑いを収めて話を促す。

長たるもの、集落に属する全ての人間に対して公平でなければならぬ。子供だからと言って軽い扱いをするな

それが前代の長である、父からの唯一の教えでもある。

屈みこんで視線の高さを近づけると、囲むように並ぶ子供達の顔を一人一人眺める。

キアナが聞く態勢になったからか、子供達の顔から緊張感がいくらか薄れるのを確認し　　おや、と思う。

一番見慣れた顔がない。

まさか、と思ったその時、やはりリーダー格の少年が口を開いた。そして告げる。

いなくなっただ、と……。

「ほんのついさっきまで、確かにいたんだ。本当だよ。でも気付いたら……」

「……いなかった？」

「うん…ねえ、長。どうしよう？」

子供達の顔に、今度は不安が浮かぶ。

確かに今度ばかりは本当に『大変』な事に違いない。知らずキアナの顔にも緊張が走る。しかしすぐに自分を抑えると、子供達ににこりと笑いかけた。

「教えてくれてありがとう。後は任せて、お前達は自分の家にお帰り」

「…おれ達も手伝うよ!」

「駄目だ」

意気込む子供達にしっかりと釘を刺して、キアナは厳しい口調で諭す。

「あの子はすぐに見つけ出すから。もしかしたら《神殿》の方まで行ってしまったのかもしれない。あの辺りは獣がいない訳でもないんだ。お前達まで何かあったら大変だからな」

その言葉に子供達はまだ何か言い足りなさそうな顔をしていたものの、結局は頷いた。

こと、命の危険が絡むと子供相手でも　　否、そうであるからこそ厳しく接するキアナの気性を、彼等もよく知っていたからだ。  
「約束しよう。必ず見つける」

キアナの約束する言葉に、彼等も任せる気持ちになったのだろう。それが表情でもわかったが、それでも駄目押しで尋ねて来る。

「…《聖木》に誓って？」

それはいつしか約束を交わす時にお決まりのように口にするようになった確認の言葉。

キアナは微笑し、きっぱりと頷いてから応えた。

「ああ、《聖木》に誓って」

+ + +

少女は一人、ぽつんと立ち尽くしていた。

年の頃は五つか六つ。黒髪を頭の上の方で一つに束ね、身に着けている服はこれからの成長を見越してか、年長の者から譲り受けたのか、何処となく身体に合っていないかった。

柔らかな緑の葉の隙間から、優しい木漏れ日が降り注ぐ。

吸い込まれるような大きな瞳は、底の見えない深い色。そこに映っているのは、空に大きく腕を広げた大樹の姿。

「…こんな所で何をしているんだい？」

魅入られるように樹を見上げる少女の背後から、そんな声がかかる。

他に誰もいないとばかり思っていた少女は、びくりと肩を揺らし、そろそろと声の方に目を向けた。

そしてそこに立つ人物が自分の既知の人物でない事に気付くと、訝しげに尋ねる。  
いぶか

「…だあれ？」

「秘密」

にこりと人好きのする笑みを浮かべて、彼は軽い口調でそんな意地悪な事を言う。

少女は少し警戒した。父親からも母親からも、言い含められた事だ。



知らない人と、むやみに口を利いたり、その後を付いていたりしてはいけないよ……

けれど、同時に不思議と何処かで会った事が気がしてならなかった。

そう思うと確認を取らずにはいられなくて、少女は警戒する態度はそのままに口を開く。

「あたし、何処かでお兄さんに会った事、ある？」

「ないよ」

やはり気軽な口調で否定されて、少女は少し混乱する。

「でも、あたし…会った事があるような気がするよ」

「じゃあ、会った事があるのかもね」

「……」

「こんな所に君みたいな小さな子が一人でいるものじゃないよ。昔程じゃないけど、危険な場所である事は変わりないんだからね」

そんな説教じみた事を言いながら、彼はゆっくりと歩み寄ってきた。

一瞬、逃げるべきだろうか、と少女は考えたが、行動を起こす前に相手が先に立ち止まってしまった。

少女の足で数歩先、手を伸ばしても届かないけれど、瞳の色がはっきりわかる程度には近い距離。

そこで立ち止まった彼は、そのまま特に何も言うでもなくにこのことそこにいて、少女は一体どんな対応をすればいいのかわからなくなかった。

そのまま黙ってしばらく見詰め合う。二人の間を緩やかな風が一度、二度と通り過ぎていった頃、唐突に彼が口を開いた。

「何故、空を見上げていたんだい？ 随分長い事、じっと見ていたね」

その質問に少女は少し驚く。

一体いつから見ていたのだろう。実際、少女はかなり長い事一人で空を見上げていたのだ。

「…見ていたのは、空じゃないよ」

彼の口調が何処となく楽しげだったから、何となく答えてしまう。彼はどうやらここから去ってはいくれないようだし、かと言ってここから逃げ去るような事も出来ない以上、話した方が良いでしょう気がしたからだ。

「《聖木》を見てたの」

「…へえ？」

少女の言葉に、彼は少し驚いた顔をする。そんなに意外な事だったのだろうか。

その反応が少し可笑しかったので、つい調子に乗って、少女はここへ来た目的を喋ってしまった。

「あのね、本当は秘密なんだけど教えてあげる。この木にはね、神様が住んでいるんだって。あたし達を見守ってくれる神様が、何処かにいるんだって。だから会いに来たの」

## 永遠に(2)

「…神様？」

「うん。それでね、お母さんが言ってたの。《聖木》の神様は本当はとても寂しがり屋だから、会いに行つて話しかけると喜ぶって」

それは物心つく以前から、繰り返し母が語ってくれた物語。

たくさんの寝物語でも、一番心に刻まれたもの。

母親は更にこう言っていた。

人はこの木がなければ生きて行けない弱い存在だから、常に感謝する心を忘れてはならないよ。

在るのが当たり前だからってそれに甘えては駄目だ。

生き物は目に見えない所で繋がりが合っている。この木と人のように。

…人はどうしても身近に在るものほど扱いが疎かになる。きっと、何十年も経ってしまえば、この木に対する感謝も薄れてしまうだろう。

それはどうしようもない事だ。人はとても忘れやすい生き物だからね。

だから お前にだけは話しておこうと思っただよ。

あの木にいる神様の事を。出来る限り覚えていておくれ。そして…お前に子供が出来たら、その子にも伝えて欲しい。

一人でいいんだ。たった一人でも覚えている事、そしてそれをずっと伝えてゆく事が大事じゃないかと思うんだよ……。

そんな母親の話から、どうしてもその『神様』に会ってみたいくなつて、ついに一人でこんな所にまでやって来た。

本当に会えるなんて思わなかったし、どうしたら姿を見せてくれるのかわからなかったので、ただ木を見上げて心の中で話しかけたのだ。

こんにちは。いつもありがとうございます……

それからいろいろと他愛のない日常の事を報告した。

友達のお母さんに赤ちゃんが宿って、年が変わったらその友達がお兄ちゃんになるのが羨ましいとか、昨日隣の集落へ出かけていた父親が帰って来て、お土産にきれいな糸を寄り合わせた結び紐を貰ったとか、そういう事を。

そしてそれが一段落着いた頃、目の前に立つ人物が声をかけてきたのだ。

「なるほどね。それで『神様』扱いな訳だ」

少女が先程までの事を回想していると、彼は不意に呟いた。

何の事が一瞬わからなくて彼の顔を見つめ　そして今更驚く。

その顔が思っていたよりもずっと年若いものである事に。

「何で《神殿》なんてものを作ったんだろうって思ったんだよ」  
まるで目の前にいる少女の存在を忘れ去ったかのような独白は、  
今にも泣き出しそうな危うさがあって、とても口を挟める雰囲気はない。

《神殿》は少女が生まれる少し前に築かれた建物で、もともとずっと先、その根元に置かれている。

そこには常に何処かの集落から派遣された人々が数名いるようになっていて、大樹に異変がないかを配っていた。

何しろ　この大樹が枯れるような事があれば、人は生命の危機に晒される。名こそ《神殿》だが、実際の所は管理所のようなものだった。

その《神殿》を作るように提案したのは　。  
「誰か来る」

まるで夢から覚めたように彼がぼつりと漏らし、その顔から先程の泣き出しそうな気配が消えた。

「どうやら君を探しに来たみたいだよ」

「えっ？」

彼の言葉に慌てて周囲を見回すものの、人影らしきものは見当たらない。

騙されたような気持ちで彼の方へ顔を戻すと、一体いつの間に近寄ったのか、すぐ目の前に彼の姿があった。

驚いて見上げると、彼の緑色の目に小さく自分が映っている。その瞳が少し寂しげなのに気付き、少女は悟った。

お別れの時間だ。

「…お兄さん、何処に行くの？」

気がつくとなんな事を尋ねていた。何故だかこのまま行つてはならないような気がしたのだ。

…目が言っている。

寂しい、と。一人になるのは辛い、と。

その瞬間、少女は彼の服を掴むと叫んでいた。

「一緒に、行こ！」

「えっ？」

彼は面食らったような声を上げ、掴んだ手を見下ろした。まさか少女がそんな事を言い出すとは夢にも思っていなかったのだろう。

振り放されないように握る力を強めて、少女はもう一度言う。

「一人でいる事ないよ。一人ぼっちになるのは嫌なんでしょう？」

「……」

何処の誰かは知らないけれど、もしかしたら他にちゃんと帰る場所があるのかもしれないけれど。

「うちの集落に遊びに来たらいいよ。あたし、案内するよ。友達もきつと喜ぶよ、お客さまなんて滅多に来ないんだもん。ね？」

「……」

思いつく限りの言葉を並べて誘いかける。けれども彼は驚いた顔

のままぴくりともしない。

こちらが泣きたい気持ちになって来る。けれど、どうしてそこま  
で放っておけないのか少女にもわからなかった。

もしかすると…最初に会った時に思ったように、何処かで会った  
事があるような気がするからかもしれない。

そう 他人のようには、思えなかったのだ。

居心地の悪い沈黙がしばらく続いた。どうしたらいいのかわから  
ないまま、握り締めた服から手を離そうとした時だ。

「……ふ、あははは……！」

「？」

それまで固まっていた彼の口からいきなり笑い声が飛び出し、少  
女はぎよっと目を丸くした。

その目の前で、彼は至極愉快そうに肩を震わせて笑っている。そ  
の笑い声がばかにしているような感じではなかったので、少女はそ  
のまま黙って彼が言葉を紡ぐのを待つ事にした。

「…はは…驚いた。まさかそんな事を言われるなんて思わなかった  
よ」

ようやく笑いを収めた彼はそう言つと、振り解くどころか、逆に  
優しい仕草で服を握っていた手をそこから離させ、同時に諭しつけ  
るような口調で言った。

「ありがとっ、心配してくれて。でも大丈夫。一人は慣れているか  
らね」

「でも……！」

「本当に大丈夫。…そういうお人好しの所はキアナ似だね」

「……！」

今度は少女が驚いて声を失くす番だった。

### 永遠に（3）

「…お母さんを知ってるの!？」

「うん、まあ…ね。白状してしまうと、本当は君の事も知ってた」

「え!？　じゃあ…やっぱり会った事あるの!？」

反射的に詰め寄るのを軽く下がる事で避けて、彼は苦笑交じりに首を横に振る。

「残念ながら、会ったのはこれが初めてだよ」

「じゃあ…どうしてあたしの事？」

「会ったのは初めてだけど、ずっと見てたからね。君が生まれた時から…ずっと。まさかこうしてこんな所にまでやって来るなんて思ってもみなかったけど。…これもキアナの血かなあ」

などと、訳のわからない事を彼は言う。

母親の事を知っているだけでなく、親しげにその名を呼び捨てている事と言い、少女は益々混乱した。

どう見ても彼は母親の友人にしては若過ぎるし、実際に友人なら母親から話くらい聞いていてもおかしくはない。

「会ったのは初めてだけど、見たた？　ど、何処から？　あたし、全然気付かなかったよ？」

第一、少女は今までずっと集落の中で暮らしていて、外に出る事も滅多に無かった。

そうなると必然的に彼は自分の集落の人間である事になるが断言してもいい。彼は集落の人間ではない。

いくら幼くてもその奇妙さはわかる。少女は必死に問い詰めた。

「お兄さんは何者なの？　何であたしの事　」

「…それはこれから来る人に尋ねてみるといいよ。ほら、向こうから駆けてきている。君もよく知っている人だ」

はぐらかされるような気もしたが、彼の指が指し示す方角に確かに人影が見えた。

少女と同じ長い黒髪。こちらは結わずに流して、駆けてくる勢いで左右に動く。遠目でも誰かすぐにわかった。

「お母さんだ」

確認したと同時にどうしよう、と思う。黙ってこんな所に来たのを怒っていないといいけれど。

何しろ母親は女だてらに集落を束ねるだけあって、怒ると相当に怖い。反射的に後ずさりかける背を、彼の手が優しく押しとどめる。「ほら、行つて」

「で、でも……」

「相当心配しているはずだからね。無事な姿を見せて、先に謝ればお咎めもそんなにないよ。…キアナは昔から、先に下手に出られると、振り上げた手を振り下ろせなくなるんだよね」

くすくすと、小さく笑いながらも、何処か懐かしげに背後から囁かれる声に不思議な気持ちになる。

やっぱり、何処かで会った事がある気がする。

この顔には見覚えがないけれど、すぐ身近にいたような。

その時、母親も少女の姿を確認したのか、名を呼ぶ声が届いた。これはもう、逃げも隠れも出来ない。少女は覚悟をし、背後を振り返った。

彼はやっぱり見知らぬ顔で、それでも知っている気がする笑顔を浮かべて少女を見ている。視線で背中を押してくれる。

そしてもう一度繰り返し返した。

「行つて。さっき言った事を忘れずにね」

「…うん」

ついに少女は頷き、再び視線を戻すと駆けてくる母親の姿は先程より大きくなっていた。

ぼん、と軽く背中を押されて。

少女はそれを切っ掛けに、母親に向かって駆け出した。その背に彼は別れを告げる。

「さよなら、リーウ。会えて嬉しかったよ」



小さな小さな囁きは、風の子供のように勢いよくかけてゆく少女の耳に届き、その足を一度だけ止めた。

名乗った覚えのない少女は驚いて振り返り けれどもそこにはもう、誰の姿も見当たらなかった……。

+ + +

「リーウ！ この、馬鹿娘！」

先程の忠告に従って、先に無茶をした事を謝ろうと思ったのに、それをさせない勢いでがばつと抱きかかえられた。

父親にならともかく、母親にそんな乱暴な事をされたのはずいぶん久し振りで、咄嗟にその身体にしがみ付く。

「心配、させて……っ」

ぜいぜいと荒い呼吸が耳に届く。

途端にすぐく申し訳ない気持ちになつて、少女 リーウはぎ

ゅつと抱きつく腕に力を込めた。

「ごめんなさい……お母さん……」

「まったくだ。……一体、こんな所に何をしに来たんだ？ 一人で行ってはならないと、言っておいただろう」

「うん……でも、会いに行きたかったんだもん」

「会いに？」

少しずつ息を整えながら、母親 キアナは娘を地面に降ろした。

流石にもうじき七七になる子供は重くて、背負うのならさておき、ずっと抱えているのは少々辛い。

「一体誰に会うと言うんだ」

嘘をついているとは思わないが、集落から《神殿》の間にある荒野に住んでいる人はない。疑問を隠せずに問いただと、リーウはあつさりと答えてくれる。

「神様」

「……」

確かにこの木には『神様』が住んでいると話して聞かせた。寂しがり屋であるような事も。でもまさか、それを頭から信じるばかりか、本当に会いに来るとは。

我が娘ながら、その素直さと実行力は正直末が恐ろしい。

「…それで、会えたのか？」

答えはわかりきっているものの、一応確認を取る。するとリーウは思った通りに首を横に振った。

「会えなかった。でも、変なお兄さんには会ったよ」

「…何だつて？」

予想外の言葉が娘の口から飛び出すにいたって、キアナはぎょつと目を見開いた。

ここに住む人はいないはず　そして《神殿》の人間がここま  
で出て来る事も皆無のはずなのに、一体娘は何者に会ったと言っ  
か。

しかも　『変な』という形容までついては、心配すると言わ  
れてもしない方がおかしい。

キアナは慌てて娘の視線の高さにまで屈みこみ、その目を見つめ  
て確認を取った。

「その人は、どんな人物だった？」

「え？」

「どんな資格好をしていたんだ？」

重ねて尋ねる。

大体の年恰好がわかれば、他の集落の人間であっても誰か判明す  
ると思つての事だった。

…太陽の光による脅威がなくなつてから、人口は多少以前より増  
えたが探すのに困難な程でもない。そう思つたのだが、リーウはし  
ばらく考えた後、小首を傾げたのだった。

「…どうした」

「えとね…わかんなくなつちやつた」

「はあ？」

耳を疑う。

リーウは親の欲目なしでこの年にしては利発で、物覚えも悪くはない。なのに、先程まで一緒にいたはずの人間の事を忘れるなんてとても信じられる事ではなかった。

「でも、お母さんも見たでしょ？ あたしと一緒にいた人だよ。もういなくなっちゃったけど……」

「一緒にいた？」

思い返してみると、娘の姿を荒野の真ん中で発見した時、そこに他の人影は見えなかった。障害物などない場所だ、もし本当に誰かいたのから気付かないはずもない。

そんな母親の困惑に、リーウは焦ったように言い募る。

「いたよ！ ねえ、見たでしょ？ ……そうだ、あのお兄さん、お母さんの事知ってたよ。あたしの名前も、言わなくても知ってた。昔から知ってるって、言ってたよ？」

「わたしの事を……？ 昔から……」

思い返すように呟いたその時、ふと閃くものがあった。

「まさか……」

思い浮かんだ想像は、あまりにも非現実的な事で、キアナはすぐに心の中で否定した。

そんなはずがない。……ずっと、会いたいと望んでいるのに、結局今まで《彼》はその姿を見せてくれないばかりか、声を聞かせてくれる事もなかった。

いつかのように忘れる事が怖くて、周囲を説き伏せて《神殿》を作りもした。生まれた娘に、『リーウ』の名をつけた。娘に……誰にも話せない真実の一部を語って聞かせもした。

この気持ちがあってもなんなのかわからない。

あれから数年後に結婚した夫の事は尊敬しているし、愛していると思う。その気持ちとはまた違う。

今でもやっぱり、キアナにとっては『家族』なのだ。

だから過去にも出来ないし、叶うのならまた会いたいと思う。幼い頃から側にいて、ある日いきなりいなくなってしまった大事な人に。

恋とか愛とかではないけれど、キアナにとって《彼》　　リー  
ウは特別な存在なのだ。今までも…そして、これからも。

その時だ。まるでふと思い出したように、娘が声を上げた。

「そうだ！　すごく綺麗な、緑色の目をしてたよ！　あの、葉っぱみたいな…！」

「　　！！」

反射的に目は遙か先にある大樹に向かう。

大地に根付き、枝葉を広げているその姿はまるで何かを守るかのよう。

「そう、か……」

ずるい、と思う。自分には会ってくれないのに、娘には姿を見せるなんて。

でも心の何処かでほっとした。《彼》は　　ちゃんとそこにいる。生きている。自分達の事を忘れた訳ではないのだ、と。

「お母さん？　…やっぱり知ってる人？」

「うん？　ああ…まあ、そうかな」

「本当！？　ねえ、誰？　あたしが知ってる人じゃないよね？」

何と説明していいものだから迷って曖昧に答えると、すごい勢いでリーウが詰め寄ってくる。…余程、謎を残して去ってくれたらしい。

後で説明する身にもなれ、と心の中で詰<sup>な</sup>めてから、キアナは好奇心を顕<sup>あらわ</sup>にした娘にっこりと笑いかけると告げた。

「　　『神様』だよ」

## Epilogue

あと数日でキアナの誕生日。

キアナの家に来て、初めての。

お祝いに一体何をあげたらいいのか、考えながら外を歩いていたら、若いお姉さん達が話している声が聞こえたきた。

「…じゃあ、来月？」

「うん、そう……」

「おめでとう！ 良かったじゃないの。…幸せにね」

どうやらお姉さんの一人が来月結婚するらしい。

そついや、キアナは普段は女の子らしくなくて、危ない事ばかりしてるけど、花嫁さんを見るのは好きだと言っていた事を思い出す。

数月前にもやっぱり結婚式があつて、集落のみんなでお祝いした。その時言っていたのだ。

『ほら、あの腕飾り。あれは集落の女の人達が一つずつ持っているを出し合ったものなんだ。「困難があつても負けずに乗り越えられるように」って祈りが込められているんだって』

色とりどりで、柄も様々な腕飾りをつけて、その時の花嫁さんとはとても幸せそうに見えた。

それを遠目にうつとりと眺めながら、キアナが小さく呟いた。

『…あたしも、あんな風にお祝いしたいなあ』

お祝いされたい、じゃなくて、お祝いしたいと言う辺りがキアナらしかった。

キアナは自分が喜ぶ事も好きだけれど、むしろ周りが喜んでくれる事の方が好きだった。…ただし、当時は悪戯が過ぎて、喜ばれるばかりか怒られてばかりいたけれど。

そういう事情はさておき、祝う為にはまず自分がそういう飾りを持つていなくてはならない。

まだ子供のキアナは当然そんな物を持つてはならず、女性達のお祝いに参加は出来ないのだ。

年頃になれば、自分で作ったり           あるいは贈られたりするのだろっけれど。

そこで思い浮かんだ。

そうだ、キアナに首飾りを作ってあげよう。そうしたら、来月のお祝いにキアナも参加出来るし、きっと喜んでくれる。

キアナのお日様のような笑顔が思い浮かんで、これは何としても作らなければという気持ちになった。

が。

すぐに気付く。材料を何処から持ってこればいいのか、という事を。

(どうしよう)

木切れなんて簡単に手に入らない。

今これから家を建てる人だっているはずもない。折角いい考えが思い浮かんだのに           と思ったその時だ。

ふと閃いた。

そうだ。ないのなら『作り出せ』ばいい！

一気に心が湧き立った。そのまま村の外れの人気のない場所まで小走りで移動して、手頃な場所を見つける。

地面が露出していて、あまり乾燥していない場所。同時にこれから起こる事を他の誰にも見咎められない場所を。

やがて見つけたその場所に、そつと手を伸ばした。

一度だけ周囲を見回す。…誰もいない。

よし、と一度だけ頷くと呼吸を整えて剥き出しの地面に触れた。

それから長い時間、ずっとそこに手をかざし続け           やがて何

もなかったはずの場所に亀裂が入った。その亀裂は徐々に広まりやがてそこから、薄茶色を帯びた何かが顔を出す。

…それは木の根っこに似ていた。

「…はあ」

思った以上に時間も力も必要になってしまつて、思わずため息をつく。

けれどもまだまだ本番はこれからだ。

必要なのはほんの少しの量。顔を出したそれに触れ、その成長速度を高める。するとその薄茶色のものは、たちまちすっかりとした木肌を見せた。

「…出来た」

それは特に力を込めなくても、成長した部分だけぽろりと落ちた。後はこれを細かく切つて削つて磨いて色をつけ、穴を開けなくては。やる事は山積みで、それでもそれらの作業一つ一つが楽しい事に思えてならなかった。

…こんな気持ちを抱いたのは生まれて初めてだった。

誰かの為に、誰かに喜んで貰う為に何かしたいという気持ち。これはきつと、キアナの影響に違いない。

キアナの 初めて得た『家族』の。

それは決して不快ではなくて、むしろ幸福で。何故か泣きたくなる。

「…キアナが探しに来ないうちに、戻らなくちゃ」

手に入れた木の欠片を懷に隠して立ち上がる。

…帰る場所があるという事の幸せをかみ締めながら。

誕生日までに間に合わないかもしれないけれど、完成したら渡そう。

ありがとう、と大好き、という気持ちを込めて。

+ + +

光。

それから水。

そしてほんの僅かなあなた達からの愛情。  
わたしはそれで、生きてゆける。

たとえ君がこの地上からいなくなつて、覚えていてくれる人が一  
人もいなくなつてしまつても。  
ずっと見守っている。  
君が生きたこの場所を。



## Epilogue (後書き)

最後まで読んで下さいましてありがとうございます(^ ^)  
こちらの作品も若干古く、実質足掛け2年かかって書いたものだったりします。

元々、この物語のプロット自体はさらに古く、わたしが高校時代に考えたものがベースになっています。

テーマは「共生」。

ただし、言葉の意味どおりの生活形態だけではなくて「一緒に生きてゆく」という意味もあります。

宇宙を旅して惑星に根付く植物。

芽吹くにはその星に住む生き物の協力が必須で共生する事でしか生きてゆけない存在……。

そんな設定考えたはいいいのですが、当時のわたしの文章力ではとても満足の行くものが書けなかったのです。

過去のわたしと現在(といっても五年以上前ですが)のわたしの合作とも言えます。

まだまだ稚拙ではありますが、この物語がどなたかの心に残れば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9035/>

---

光の子

2010年10月8日14時26分発行